

篠 振 遺 跡

——太宰府市の文化財 第11集——

1987

古都大宰府を守る会

篠 振 遺 跡

—— 太宰府歴史・スポーツ公園建設に伴う ——

埋蔵文化財発掘調査報告書

1987

古都大宰府を守る会

序

本書は、太宰府市が昭和60年度に実施した篠振遺跡の発掘調査報告書であります。

調査の結果、奈良時代の火葬墓から銅製の帯金具や水晶玉が発見され、県指定史跡として保存されております宮ノ本遺跡と併せて、太宰府市西方の丘陵地帯が古代の官人たちの墳墓の地であったことが確認されました。

さらに室町時代の土葬墓と火葬場も発見され、太宰府における中世の葬送墓制についても貴重な資料を得ることができました。

ささやかな一書ではありますが、本書が古代・中世の研究資料として活用されとともに、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となれば幸甚に存じます。

最後に、極寒の中、連日、調査に参加していただきました作業員の方々に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会

教育長 藤 壽人

例 言

1. 本書は1984年度に実施した篠振遺跡（太宰府市大字吉松字篠振305－1 他所在）の発掘調査の概要である。

2. 調査は1984年12月5日から1985年2月5日まで実施した。

3. 調査面積は1560㎡、開発対称面積は45000㎡である。

4. 調査組織

調査主体 太宰府市教育委員会

総 括 教育長 藤 壽人

庶 務 社会教育課長 花田勝彦

文化財係長 黒板 力

文化財係主事 岡部大治

調査担当 文化財係技師 山本信夫

〃 狭川真一

5. 調査参加者（順不同・敬称略）

田中平助 大野謙太郎 八柳健之助 竹林義之

中島タキノ 中島タカ子 松島順子 白水イセノ 萩尾万寿子 萩尾マキ子 平田ソヨ 田

原智恵子 高原改良子 白木ハルミ 中嶋はじめ 徳永モモエ 萩尾カネ子 萩尾須磨子

田中テル子 大迫フミ子

永見秀徳 田村充 半澤幹夫（奈良大学学生）

6. 整理参加者（順不同、敬称略）

原野正子 吉田勝子 米川治子

7. 出土人骨の鑑定は九州大学教授永井昌文先生に依頼し、測量用基準点の計測には九州歴史資料館主任技師横田賢次郎氏のお手を煩した。

8. 遺構実測図、測量図及び遺物実測図は、調査担当者が主として行ない、緒方俊輔・山村信栄・山田富美・永見秀徳・田村充・半澤幹夫の協力を得た。遺構の写真撮影は調査担当者、遺物の写真撮影は岡紀久夫、調査地の空中写真は(有)空中写真稲富によるものである。

9. 本書の執筆はⅣ章に永井先生の玉稿をいただいた。他は山本、狭川が分担し目次に記した。編集は狭川が担当した。

目 次

I. 遺跡の位置	(狭川)	1
II. 調査経過	(山本)	3
III. 調査の概要		4
1. 西調査区	(山本)	4
①墳墓群の立地		4
②遺構		5
③出土遺物		6
2. 東調査区	(狭川)	9
(1) 墳丘		9
①遺構		9
②出土遺物		11
(2) 土葬墓		14
①遺構		14
②出土遺物		16
(3) 火葬施設		17
①遺構		17
②出土遺物		19
(4) 土墳墓		20
①遺構		20
②出土遺物		22
(5) 窯跡		22
1号窯跡		23
①遺構		23
②出土遺物		23
2号窯跡		25
①遺構		25
②出土遺物		27
灰原		27
①遺構		27
②出土遺物		27

(6) その他の遺物	30
①遺構	30
②出土遺物	30
IV. 人骨鑑定	(永井) 31
V. 調査まとめ	33
1. 西調査区	(山本) 33
2. 東調査区	34
(1) 墳丘、土葬墓、火葬施設	34
①造営時期	(山本) 34
②遺構の性格	(狭川) 35
(2) 土葬墓	(狭川) 40
(3) 竈跡	(山本) 40



Fig.1 主要遺跡分布図 (1/4000)

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|--------------|-----------|
| 1. 大宰府条坊跡 | 2. 水城跡 | 3. 陣ノ尾遺跡 | 4. 筑前国分尼寺跡 | 5. 筑前国分寺跡 |
| 6. 国分瓦窯跡 | 7. 御笠団印出土地 | 8. 遠賀団印出土地 | 9. 大野城跡 | 10. 岩屋城跡 |
| 11. 浦城跡 | 12. 原遺跡 | 13. 鉾ノ浦遺跡 | 14. 御笠川南条坊遺跡 | 15. 君畑遺跡 |
| 16. 般若寺跡 | 17. 神ノ前窯跡 | 18. 篠振遺跡 | 19. 向佐野窯跡 | 20. 長浦窯跡 |
| 21. 宮ノ本遺跡 | 22. 剣塚古墳 | 23. 杉塚廃寺 | 24. 唐人塚遺跡 | 25. 塔ノ原廃寺 |
| 26. 桶田山遺跡 | 27. 武威寺跡 | 28. 道場山遺跡 | 29. 市の上遺跡 | |

I 遺跡の位置 (Fig. 4)

「天下の一都会」と称された大宰府の郭外西辺部は、標高50～70mの低丘陵地帯が続く。この丘陵地帯は須恵器生産を行なった牛頸窯跡群の所在するところで、陶邑・猿投とともに日本三大古窯の一つに数えられる。篠振遺跡は牛頸窯跡群の東南端に位置し、その先端部は水城跡へと連なる。

この丘陵の主要な遺跡である牛頸窯跡群は、御笠川に向って北流する牛頸川を挟み東西約4km、南北約5kmの広範囲に及び、6世紀から8世紀にかけて大規模な須恵器生産活動が印される。しかし近年、乱開発が進みその影響で事前調査の必要性が生じ、神ノ前⁽¹⁾・向佐野・長浦⁽²⁾・宮ノ本⁽³⁾・野添・大浦⁽⁴⁾などの著名な窯跡がこの篠振遺跡周辺で調査されてきた。

大宰府が成立すると窯業の生産継続中であるにもかかわらず、この周辺一帯は官人たちの葬送の地に利用され始める。買地券の出土した宮ノ本1号墓をはじめとする同遺跡一連の墳墓群⁽⁵⁾はそれらの一つである。大宰府郭外東辺部の丘陵地にもそうした墳墓群が検出されているところからみて、当時の在地官人たちの葬送の実態が究明されつつある。

大宰府の衰退と共にこの丘陵の利用も途絶え若干の空白期間がみられるが、中世に至って再び葬送の地として利用され始める。宮ノ本遺跡S X04・05などの火葬施設は、この篠振遺跡にも検出された。こうした火葬場から立ち上る煙は落ちゆく夕日を背景にして生活地帯から眺めることができたであろう。そして人々は極楽に往生を遂げる者を想い、悲しみと涙に暮れていたのであろう。

現代に至りこの丘陵は大規模に宅地化され、過去の遺産の多くは消滅した。いまでは太宰府の街から西方を見ても、古を忍ぶ人々は少ないに違いない。

註

(1)酒井仁夫ほか『神ノ前窯跡』（太宰府町文化財調査報告書 第2集）太宰府町教育委員会 1979

(2)亀井明德ほか「向佐野・長浦窯跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告－Ⅵ－』福岡県教育委員会 1975

(3)山本信夫ほか『宮ノ本遺跡』（太宰府町の文化財 第3集）太宰府町教育委員会 1980

(4)小田富士夫ほか『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財調査報告書 第43集）福岡県教育委員会 1970

(5)(3)に同じ

Ⅱ 調査経過

篠振遺跡は埋蔵文化財包蔵地として熟知されており、昭和60年春頃から、この地に市営運動公園の建設計画が生じたため事前に発掘調査が必要となった。その後、運動公園は「太宰府歴史・スポーツ公園」と正式呼称されることになり、有吉市長の意向を反映し、史跡の町太宰府にふさわしく文化財とスポーツを併存する新施設として公表されてきた。同年11月14日～12月3日にかけて、試掘調査（Fig. 2）を実施したところ、墳墓や窯跡が検出されたので、これらの埋蔵文化財が歴史素材として生かされるよう、再三、協議を重ねてきた。しかし造成計画のうえでは保存が不可能となったためやむなく全面を本調査することになり、調査後、遺構は消滅した。現在できあがった公園にはこうして歴史資料が全く失せてしまった点は残念でならない。



Fig. 2 篠振遺跡調査地点位置図（1：2500）

Ⅲ 調査の概要

1. 西調査区

①墳墓群の立地(Fig.3.4)

墳墓群の造営に先だち丘陵の頂部近くの東側斜面を平面半円形のテラス状（南北8m×東西最大幅3m）に造成している（SX010）。その造成の方法は山頂を平らに削平整地するのではなく、やや下った位置を削平して頂上側に段をつけ、山頂部が背景となる⁽¹⁾。テラス上には6基の円形、不整形ピットと小ピット1が検出された。これらの7基のピットはテラスSX010が埋没する以前に開削されている。

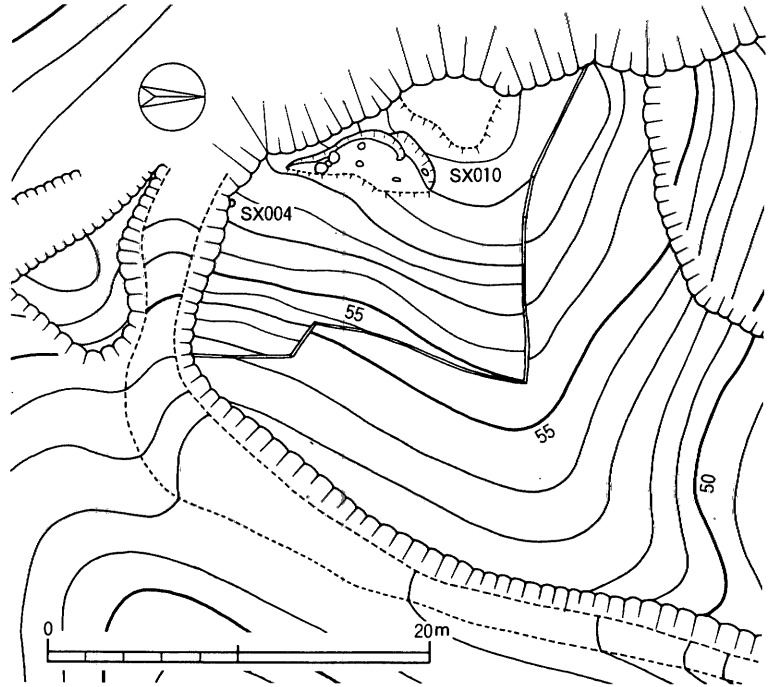


Fig. 3 西調査区地形測量図

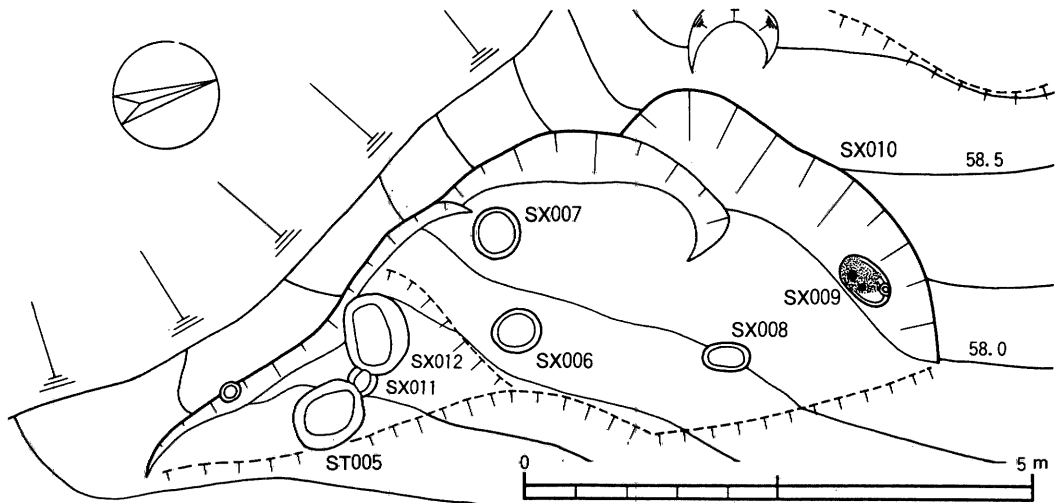


Fig. 4 西調査区遺構配置図

②遺構 (Fig. 4. 5)

S X 007

平面は長径0.45×短径0.4mの円形を呈する。深さは最深部で7cm。埋土は暗灰黄色土で全体に炭が少し入る。火葬墓の可能性はある。

S X 008

平面は長径0.48×短径0.35mの楕円形を呈する。深さは約0.15m。埋土は炭・灰からなり真黒色をなす。火葬墓の可能性はある。

S X 009

平面は長径0.6m×短径0.33mの楕円形を呈する。深さは2cm。底面はよく焼けており凹凸をなす。焼け面の上は炭、灰層がある。

S X 006

平面は長径0.45×短径0.42mの円径を呈する。深さは0.13m。断面図のようにピットの中央部幅9cmはとくに炭の多く入る暗黄灰色土で、周囲の埋土は灰黄色土である。底面は一方(南側)が低い。

S X 012

平面は長軸0.97×短軸0.73mの隅丸長方形を呈する。深さは約0.40m。埋土は炭化物をごく少し含む暗黄灰色土である。須恵器坏小破片が出土した。S X 011より古い。

S X 011

径0.3m前後の小円形ピットである。深さは4cm。底面は火熱をうけ淡赤紫色をなす。S X 012より新しく、S T 005より古い。

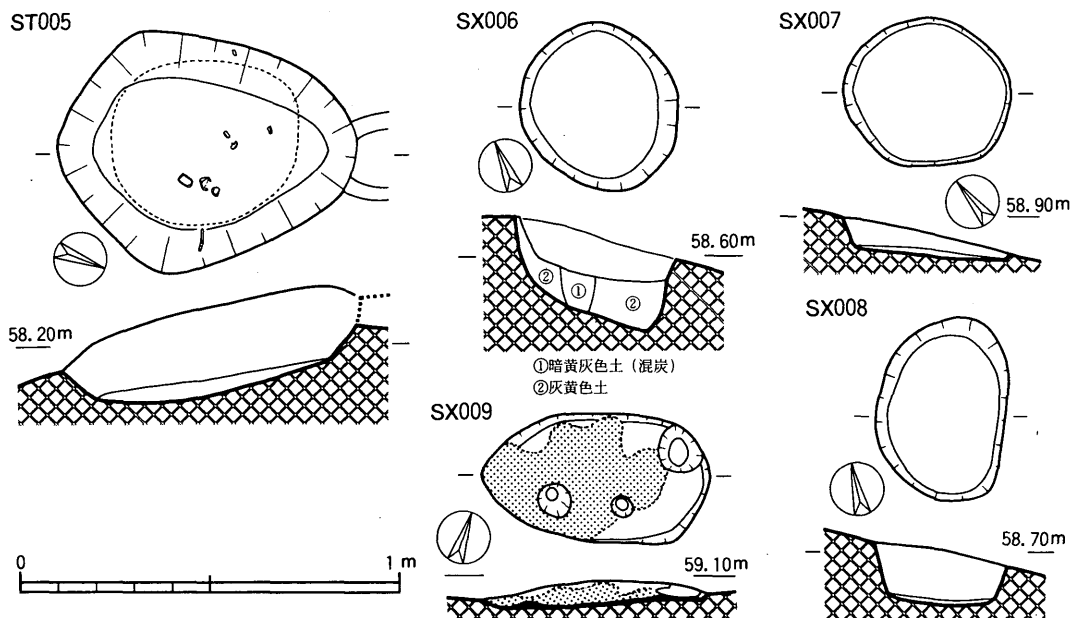


Fig. 5 西調査区検出遺構実測図

ST005 (Fig. 5・6)

(遺構規模・埋土)

火葬墓である。平面は不整楕円形で長径0.79×短径最大0.64m。深さは7～15cm。底面は南東側が低くなる。埋土は炭・灰・花崗岩パイラン土からなるが、とくにピットの中央部は炭・灰で充満し真黒色をなす。その範囲は平面で49×44cmの楕円形の範囲、断面では底面上2～5cmから上位の範囲である。底面近くの埋土はパイラン土が多く炭・灰は少ない。SX011より新しい。012→011→005の順に古→新となる。

(遺物出土状態と埋骨の方法)

遺物は焼骨片、銅鏝(丸軀1、巡方1、陀尾1)、鉄器3(鉄鏃?2、他7片)、水晶製玉2である。鉄器3片は真黒色埋土の周辺部で埋土の上位に出土し、他の遺物は真黒色埋土中出土した。遺物個々の番号と出土位置はFig 6に示される。銅鏝および水晶玉は焼骨片と混ざっ

た状態で出土しとくに配列、配置を示してはいない。鉄器は火熱をうけたのか不明であるが銅鏝、水晶製玉はいずれも火熱をうけてもろくなっている。銅製陀尾(3)の外面には布と錆着いた跡がある。丸軀(2)は下面の変形が著しい。水晶製玉(4)は完形ではなく火熱のため亀裂が入り一部欠損する。また、表面も不透明にくすんでいる。遺物の観察や出土状態から次のように推察される。被葬者は腰帯をつけて火葬された。火葬後、焼骨、炭、灰とともに焼け残った誇帯装飾品の一部も集められ、布に包んで小ピットに埋納された。蔵骨器は検出されていないことから腐朽しやすい木製蔵骨器などの使用も考慮されるが、それを示す痕跡は遺存しない。したがって、布にくるんだまま埋葬され蔵骨器を使用していない場合もあわせて考慮しておく必要がある。水晶製玉は帯に吊り下げる^{はい}佩飾と思われる。法隆寺献納宝物に類似品がある。帯金具は火をうけているので外見上は銅に黒漆を塗る烏油腰帯なのか、金銀で鍍金された金銀製腰帯なのかは確定できない。巡方、丸軀には裏金具を鉤留めしたままであり、帯に装着したままの状態を示している。

③出土遺物

ST005出土遺物 (Fig. 7、Pla.10、別表)

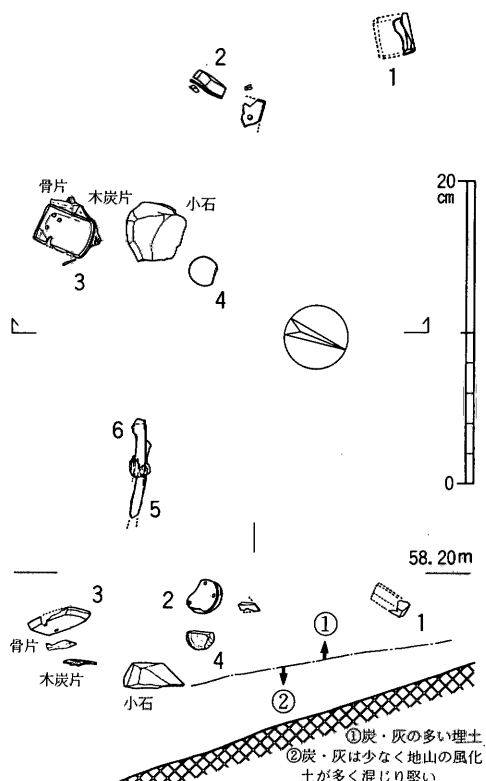


Fig. 6 ST005遺物出土状況(上・平面, 下・立面)

銅鍔

巡方 (1) 図の上下幅は2.7cm。裏金具がある。火熱をうけたため軟弱で取上げの際バラバラになっている。長方形透し孔の有無は判別できない。

丸靱 (2) 縦1.7cm、横2.4cm。裏金具があり鉤留めされている。長方形透し孔は表と裏金具にもある。下端は火熱のため変形している。

鉈尾 (3) 縦3.0cm、横3.7cm。鉈尾の縦幅は革帯の幅を示すものと思われる。鉈尾の縦幅は巡方の縦幅よりも4mm程大きいと言われる⁽²⁾。1の数値を縦幅であると仮定するならば、3と1の差を測てみると3は巡方1の縦幅より3mm大きく、前述の傾向を裏づけることができる。弧形につくる反対側の直線的な基部には上下に2孔あり、裏面3ヶ所に突起がある。2孔と裏面の鉤型突起の位置は一致しない。上端側面から前面にかけて布と錆着いた痕跡が残る。布は幅5mm間に7本の糸数を数える。布は火葬時には燃えつきてしまうから、この痕跡は火葬後のものである事は明らかで、火葬骨を包んだ布(白綿)と解釈される。

他に巡方または丸靱の破片が数点ある。

水晶玉

全部で11片出土した。

丸玉(4) 径1.9cmのもので火熱のため表面はくすみ、割れている。他に炭・灰の埋土中から

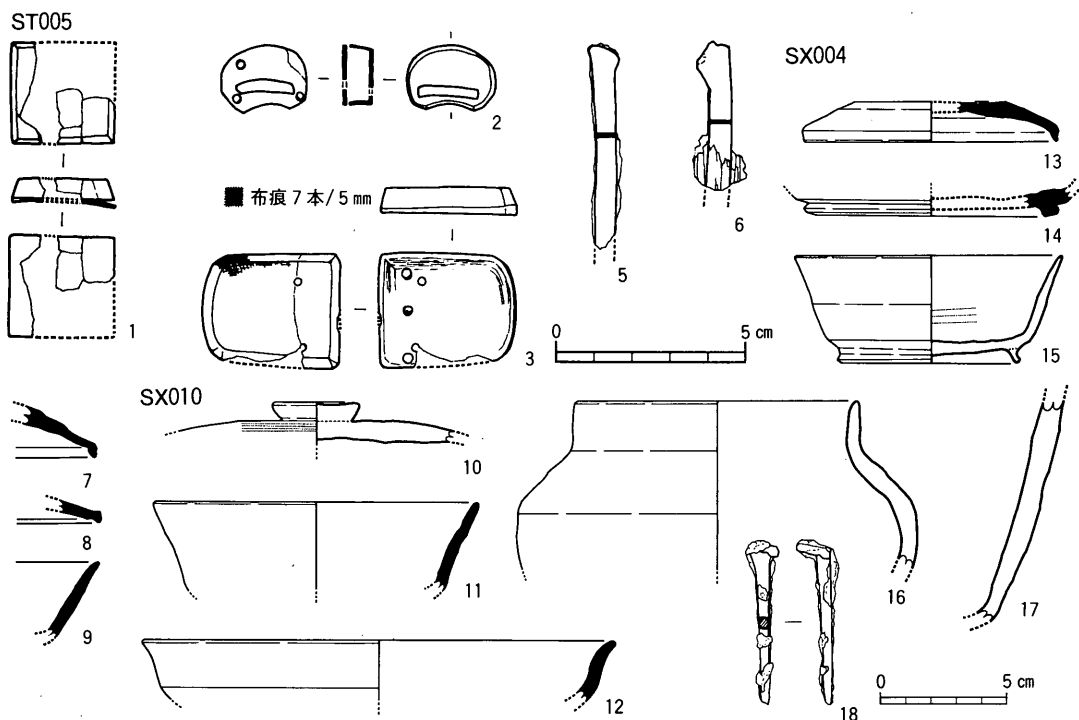


Fig. 7 西調査区各遺構出土遺物実測図 (1～6は $\frac{1}{2}$ 、他は $\frac{1}{3}$)

バラバラになって出土した破片のうち4片は接合した。これも径1.9cm。全体で少なくとも2個体はある。

鉄製品

5. 6は鉄の破片と推定される。断面は長方形。他に7片の小片があるが何か不明。

土器

須恵器

蓋5片、坏1片、甕2片があり、いずれも小破片である。これらの破片は火熱を受けたもののかよくわからないが、火葬の際、あるいは埋骨のときに混入したものと思われる。

蓋(7、8) 7の口縁部は下方にやや長めに屈折するc2類*に近いもので端部外面は凹線状をなす。つまみを有するものと思われる。天井部はヘラケズリされる。この種のタイプは大宰府政庁第Ⅰ期整地層の中に含まれる最新型(7C末)**に近く、大S D2340下層(「天平六年(734) 銘木簡出土、8C前～中葉)の中で最も多い。8C前半頃に位置づけが可能である。

8の口縁部は断面三角形でつまみのつくc3と思われる。三角形は小さく下方への突出はわずかである。端部外面はシャープである。8C中・後半、どちらかと言えば8C後半に多いタイプである。他に蓋3片がある。うち1片は天井部ヘラケズリされ、つまみを欠損するcで、さらに1片は内面を磨っている。坏蓋硯として使用されたものか。以上の5片は坏蓋である。

坏(9) 底部を欠くため無高台aか、有高台cか明確ではない。体部は直線的で口縁部は小さくわずかに外反する。内外は横ナデ調整。

S X010出土土器 (Fig. 7、pl10、別表)

段の埋土中で検出された土器で、量はわずかである。

須恵器

皿(12) 体部中位で屈折変換点があり上位は外反する。屈折点以下の外面はヘラ削りされる。やや古式の特色を有する。

坏(11) 体部中位でわずか外側へ拡張するが上位は直にひき出される。

他に蓋・甕の破片がある。

土師器

大蓋c(10) 内外ともにミガキaを加える。

他に坏a破片がある。

以上のうち12は7C末頃～8C前半、他は8Cと思われる。

SX 004出土土器 (Fig 7、Pl10、別表)

墳墓群の南側下方2mの所で検出された遺物包含層中の土器で、量はわずかである。

須恵器

小蓋a3(13) 天井部はヘラ切りのままでケズリを加えない。口縁部はやや下方に長い断面

* P.41追記参照 ** C…century(世紀)の略号。以下同様に使用する。

三角形で、つまみのない a 3 型である。

坏 C (14) 高台はやや退化的であるが外端部を上方へ跳ねる。

土師器

小坏 (15) 高台は細いが外開きの古い特徴をもつ。内面はミガキ a を加える。

壺 (16) 内外磨滅のため調整は明らかでない。2 個 1 対の把手のつく可能性もあるが破片のため不明である。

17 はストレートな体部を有することから鉢の可能性もある。外面はヘラケズリと思われる。須恵器の焼成不良品の可能性もある。その他坏 a 破片がある。18 は鉄釘で長さは 6.4 cm。上層から出土した。

以上のうち 13、14、15 は 8 C 前半～8 C 中葉を前後する頃と思われる。

註

(1) 周辺においては宮ノ本遺跡第 1 次調査の 1～4 号墓 (8 C 中～9 C、南側斜面造成)、同 2 次調査 7・8 号墓 (8 C 前半、火葬墓、東側斜面造成) などが同様な傾向を示す。

(2) 町田章編『平城宮発掘調査報告 VI』(奈良国立文化財研究所学報 第 23 冊) 奈良国立文化財研究所 1974

2. 東調査区 (Fig. 8)

尾根基部を土取りによって破壊され、先端部を近・現代の墓地で攪乱されているが、尾根上には墳丘・土葬墓・火葬施設・北斜面中位には須恵器窯跡が検出された。

(1) 墳丘

① 遺構

SX 001 (Fig. 9、10)

地山を 2 段に整形し、上段に若干の盛土を行なって築かれた墳丘遺構である。上段はほぼ円形に近いプランを呈し、据部の径約 6.2 m 高さ約 0.9 m (盛土部分は約 0.4 m) を測る。下段は粗雑な整形であるが、北半部は半径 4～5 m のほぼ半円形に近いプランを呈し、上段との間に 1～3 m 幅の平坦部を設ける。南半部は尾根筋に従って長さ約 8 m、幅 3～5 m で不整長方形の平坦部を造り、墳丘中心から南西へ約 11 m のところで幅約 2 m の溝状遺構を設け区画するものとみられる。下段は全て地山整形によって削り出され、高さは 0.25 m～0.75 m 程度である。

上段の墳丘には後世の攪乱を認める以外に遺構はなく、平坦部にも直接関連すると考えられる遺構は存在しない。関連遺構とみられるもののすべては下段据部に集中している。遺物は墳丘北半部の平坦部及び下段斜面を中心に検出され、多数の銅銭や土師器、鉄器などがみられる。

(Fig. 11 参照)

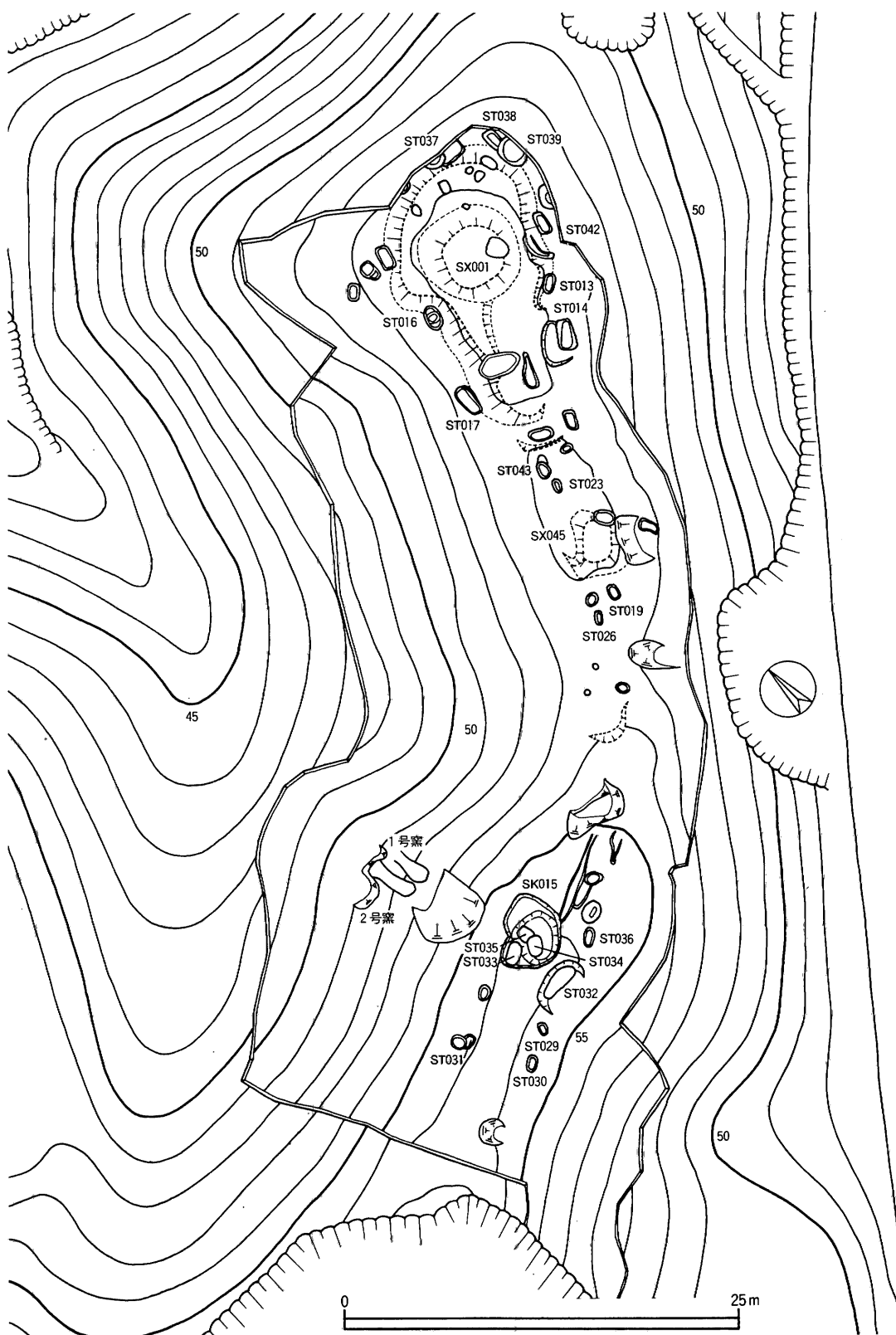


Fig. 8 東調査区遺構配置図

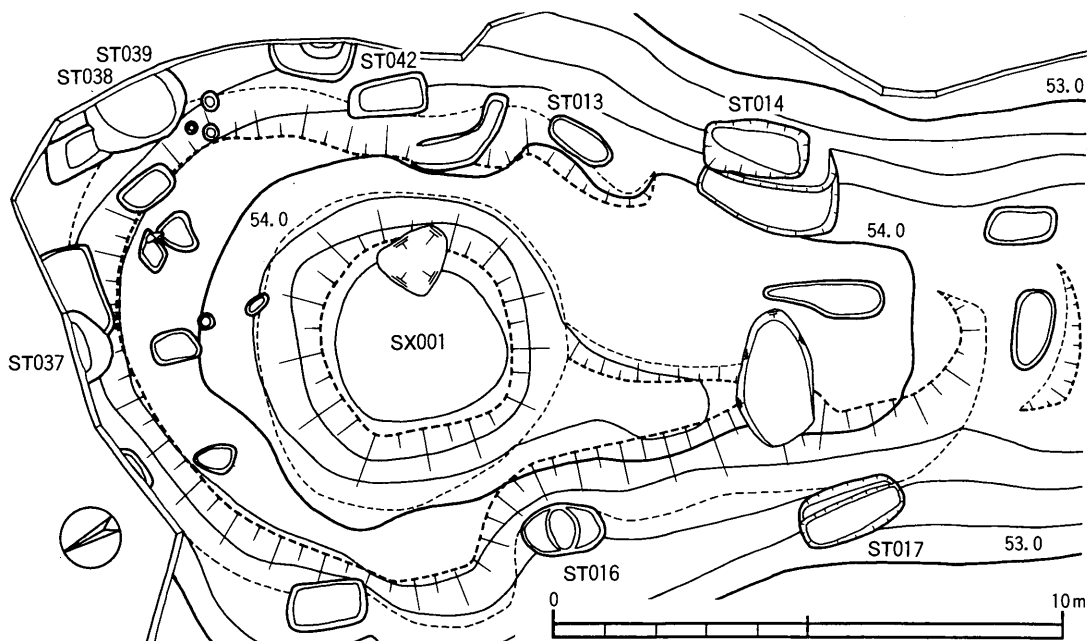


Fig. 9 SX001実測図

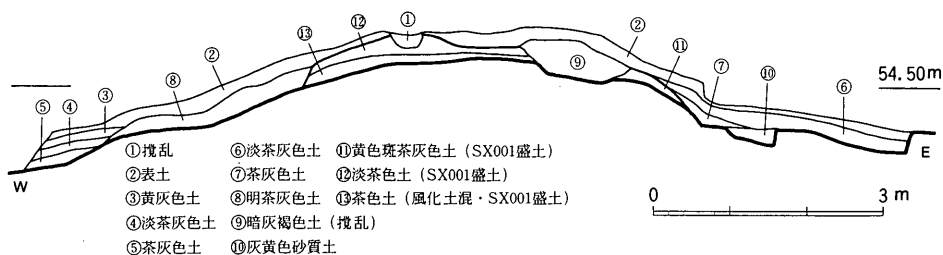


Fig.10 SX001土層観察図

SX045 (Fig. 8)

SX 001中心から南へ約20mの地点の屋根上に、地山整形によって人為的に削り出されたとみられる墳丘状の隆起がある。現状は形も崩れ、土壌状の攪乱も穿たれていて旧形を知り得ないが、当初は径（または一辺）4 m程度で高さ0.3m以上の墳丘遺構であったとみられる。この墳丘に切込む遺構および伴う遺物は検出されなかった。

このSX 045を境として北は土葬墓群、南は火葬施設群と明確にその位置は分離されている。

②出土遺物

SX 001出土遺物 (Fig.12、Pla.11、別表)

遺物は墳丘上の各地点から検出された。(Fig.11参照)

土師器

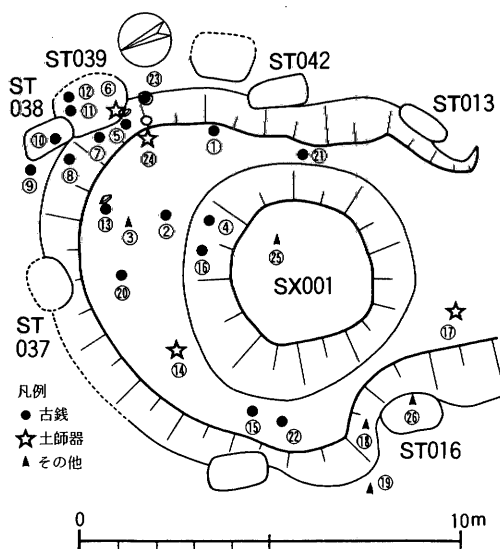


Fig.11 SX001遺物出土地点位置図

全て糸切りである。

小皿 a (1 ~ 3) 1 は口径7.4cm・器高1.5cm。内面から口縁部にかけて直線的にのびる体部をもつ。底部内面はナデ調整し底部外面には板状圧痕が遺る。器形及び法量は大SD 1805 (追加参照) の範囲に近い。⑰地点出土。2 は口径7.8cm・器高1.4cm。⑥地点出土。3 は口径8.3cm・器高1.1cm。底部内面はナデ調整し外面には板状圧痕が遺る。表土出土。

小皿 b (4) 口径6.0cm、器高1.4cmを測る。底部内面はナデ調整し外面に板状圧痕を遺す。表土出土。

坏 a (5 ~ 7) 5 は口径13.4cm、器高3.5cm。内面はナデ調整し底部外面には板状

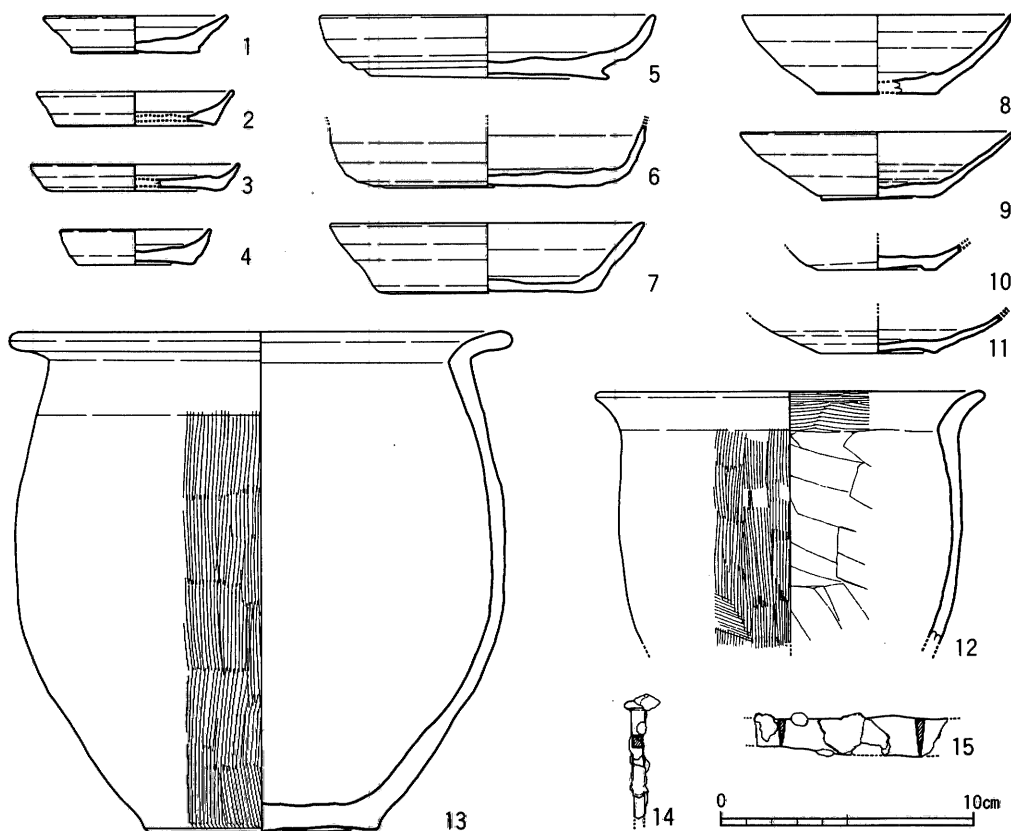


Fig.12 SX001出土遺物実測図

圧痕が遺る。体部下位の突起や段は糸切りを難にしたためについたものである。表土出土。6は口縁端部を失うが口径13cm程度に復原される。底部内面はナデ調整し底部外面に板状圧痕がみられる。⑭地点出土。7は口径12.6cm、器高2.8cmを測り、底部内面にナデを施し底部外面には板状圧痕が遺る。⑰地点出土。

坏b(8~11) 8・9は口径.10.7、10.8cm、器高3.2、2.7cm、底径4.9、4.8cmを測る。8は体部が若干内彎気味に立ち上がる深めの形態を呈するもので、大SD 1805出土坏bの平均的な法量よりもやや深めである。両者とも⑭地点出土。10は底部径4.8cmを測る。体部及び底部内面は全てヨコナデ調整でおわる。表土出土。11は底径4.8cmで体部は大きく外方に開く形態を呈する。体部及び底部内面は全てヨコナデ調整される。⑰地点出土。

小甕a(12) 口径17.5cm。8世紀後半代のものでSX 001とは直接関連しない。⑳地点出土。
弥生土器

甕(13) 体部外面及び口縁部内面をハケ目調整する。⑱地点出土。他に同時期の甕片を㉑地点と表土中で採集している。全てSX 001とは関連しない。

鉄製品

釘(14) 現存長4.7cm。㉒地点出土

刀子(15) 現存長7.5cm、最大幅1.5cmを測る。③地点出土

銅製品

銭(Fig 13) SX 001の各地点から26枚検出した(第1表参照)。このうちでは「永楽通宝」(初鑄1408年)が最も新しい。墳墓群の造営、葬送儀礼などの継続する年代の一端を示すものと思われる。

図版番号	銭貨名(初鑄年)	出土地点	図版番号	銭貨名(初鑄年)	出土地点	図版番号	銭貨名(初鑄年)	出土地点
1	永楽通宝 (明1408)	①④ のいずれか	10	皇宋通宝 (宋仁宗1039)	⑦	19	元豊通宝か? ()	⑮
2	元祐通宝 (宋哲宗1086)	①④ のいずれか	11	皇宋通宝 (宋仁宗1039)	⑧	20	嘉祐通宝 (宋仁宗1056)	⑳
3	聖宋元宝 (宋徽宗1101)	①④ のいずれか	12	元豊通宝 (宋神宗1078)	⑧	21	祥符元宝 (宋真宗1008)	㉑
4	永楽通宝 (明1408)	②	13	皇祐通宝 (宋仁宗1039)	⑨	22	祥符元宝 (宋真宗1008)	㉒
5	聖宋元宝 (宋徽宗1101)	②	14	永楽通宝 (明1408)	⑩	23	祥符通宝 (宋真宗1008)	㉒
6	永楽通宝 (明1408)	⑤	15	天禧通宝 (宋真宗1017)	⑪	24	祥符元宝 (宋真宗1008)	墳丘表土
7	永楽通宝 (明1408)	⑤	16	元豊通宝 (宋神宗1078)	⑫	25	元祐通宝 (宋哲宗1086)	墳丘表土
8	元祐通宝 (宋哲宗1086)	⑤	17	永楽通宝 (明1408)	⑬	26	元豊通宝 (宋神宗1078)	㉓
9	元祐通宝 (宋哲宗1086)	⑤	18	開元通宝 (唐高祖621)	⑮			

表1 SX001 出土銅銭一覧

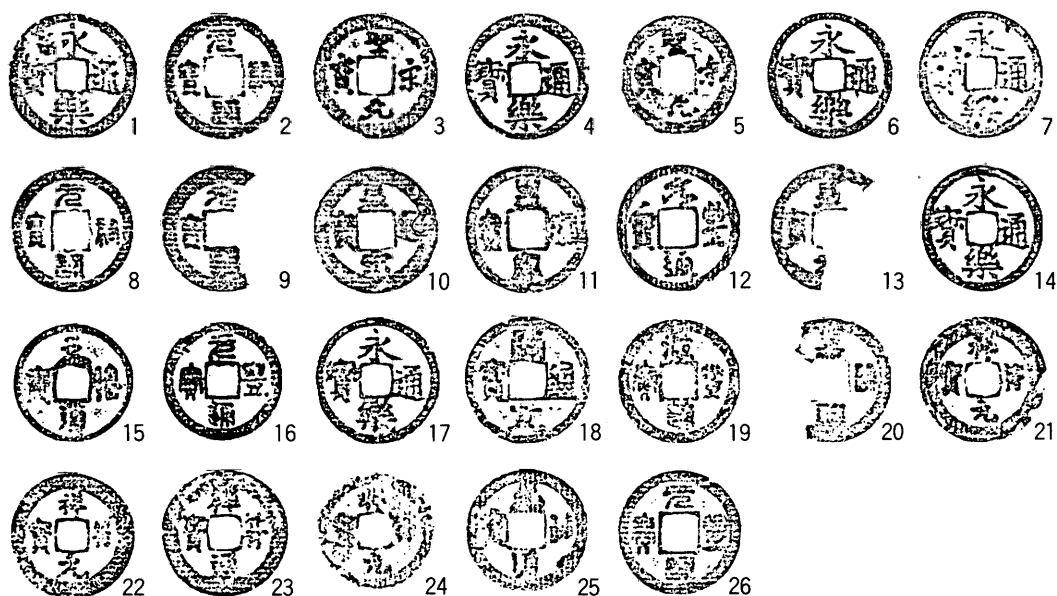


Fig.13 SX001出土古銭拓影

(2)土葬墓 (Fig.14)

①遺構

SX001の裾部に集中し大半が寸詰まり気味の隅丸長方形または不整円形を呈している。なお、後述する時期の異なる土壙墓と便宜上区別して土葬墓としたのは、木棺の使用が認められず時期、規模を異にするためである。

S T 037 東西は1.4m、南北は0.8m以上で、深さは0.8m。不整円形状を呈し、約半分が調査区外にのびているものと思われる。土壙の壁は垂直に近く立ち上がり、底部は中央付近がやや深い。出土遺物はない。

S T 038 1.5m×0.8m、深さは0.75m。隅丸長方形の墓壙で、北壁の傾斜はかなり緩やかであるのに対し他の3面は垂直に近い。S T 039を切っている。遺物は埋土中から坏bの断片を若干検出したにとどまる。

S T 039 S T 038に切られているため北辺の状況は知られないが、南北は1.9m、東西は1.4m以上、深さは0.8m。不整円形状の墓壙で、一部調査区外にのびている。南壁の傾斜が緩やかなのに対し、側面とみられる西壁は垂直に近く穿たれている。埋土中には弥生土器片を混入するが、年代を示すものはない。

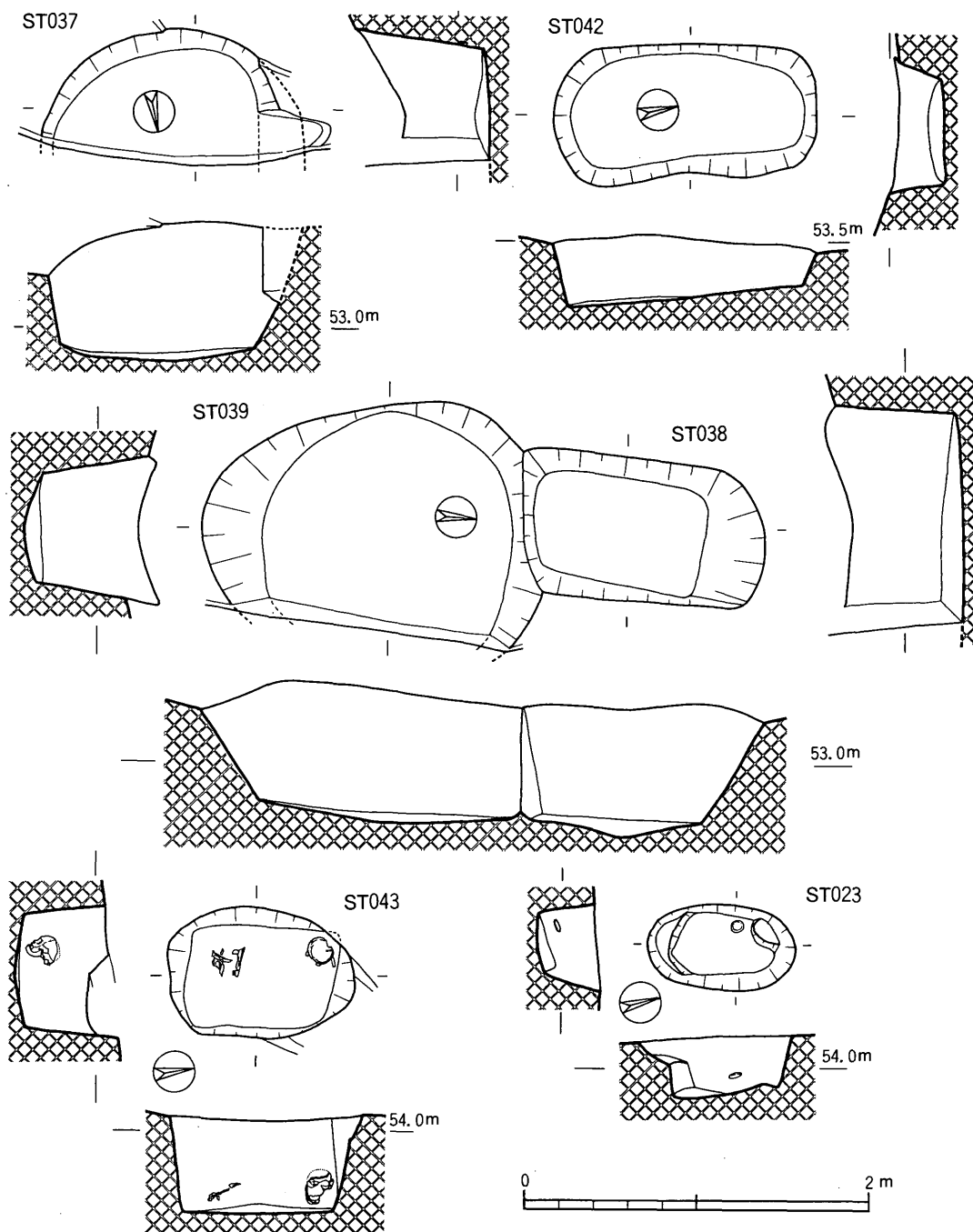


Fig.14 土葬墓実測図

ST042 1.55m×0.8m、深さは0.2～0.4m。隅丸長方形を呈する。墳壁は他に比べ緩やかな傾斜である。底は北に向うにつれ徐々に浅くなり、頭位を北に置いた可能性が考えられる。

出土遺物はない。

ST013 1.4m×0.6mの不整長円形を呈する。墓壙上面で土師器坏bが2枚重なって検出された。

ST016 1.7m×1.0mの不整長円形を呈し、底部中央付近が若干深くなる。墓壙堀削時にSX001の下段の一部を掘り込んで造っている。なおSX001㊟地点はこの墓壙上面にあたり、出土した鉄釘との関連を考慮する必要がある。

ST043 SX001の南側区画外に在り、規模は1.1m×0.75m、深さ0.4mで他に較べ若干小さい。隅丸長方形のプランを呈する。壙壁は垂直に近く立ち上がる。壙内の北西隅と中央やや南寄りに若干の人骨が遺存していた。北西隅のものは頭骨で、頭北面西の状況を呈しているように見えるが、明らかに転落したものであり埋葬当初の状況ではない。埋葬時の形態は頭骨の位置と墓壙の規模から、座位であった可能性が強い。出土遺物はない。

ST023 0.85m×0.5m、深さは0.35m。不整長円形を呈する。南小口部に小さなテラス状の段がある。埋土中に土師器小皿1点を検出したが、転落した状況であるため棺上の供献品と思われる。このST023は、先述のST043よりもさらに小さく、次項の火葬施設に近い規模であるが、焼壁は認められず炭化物も埋土中に検出されていないので土葬墓に含めて報告することとした。骨片の遺存がないので判断できないが、火葬収骨墓である可能性も残されている。

以上の他、SX001の周辺には若干のピットと浅い土壙が数基確認されている。土壙については土葬墓の可能性が充分考え得るが、土砂の流出や株の攪乱などにより決定する要素を欠いている。ピットについても単発的に検出されたにとどまり、具体的な性格付けは困難である。

②出土遺物

ST023出土土器 (Fig.15、Pla.11、別表)

土師器

小皿a (1) 口径8.8cm、器高1.3cmを測る。体部から底部内面はすべてヨコナデされ、底部外面は糸切される。板状圧痕は認められない。

ST013出土土器 (Fig.15、Pla.11、別表)

土師器

坏b (2・3) 2枚重なって検出された。口径

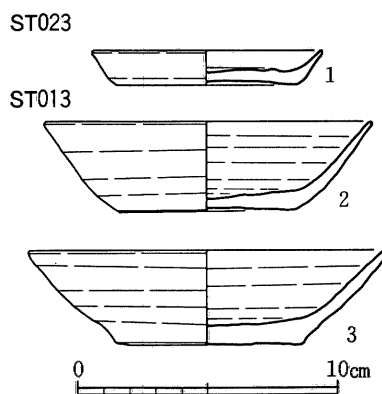


Fig.15 土葬墓出土土器実測図

12.7cm・14.0cm、器高3.4cm・3.6cmを測る。両者とも体部及び底部内面の調整はヨコナデでおわる。口径に比して底径は小さいが、大S D1805出土の坏bよりやや深めで口径も若干大きい。

(3)火葬施設

①遺構 (Fig.16、17)

尾根基部から中央付近の尾根上面及び若干下った程度の斜面に集中し、大半が焼壁を遺している。当該遺構の性格は、明らかに土壙を利用して火化したものであるものの火化後に墓としたか否かは明らかでなく、ここでは火葬施設としておく。なお焼壁は遺存しないが炭化物の充鎮するものはこの類として仮定した。

S T 026 1.05m×0.45m、深さ0.15mの隅丸長方形を呈し、南端に3つの浅い小ピットと北端に長さ0.15m、幅0.1mの張り出し部がある。壙底からやや浮いた位置に20cm程度の石を

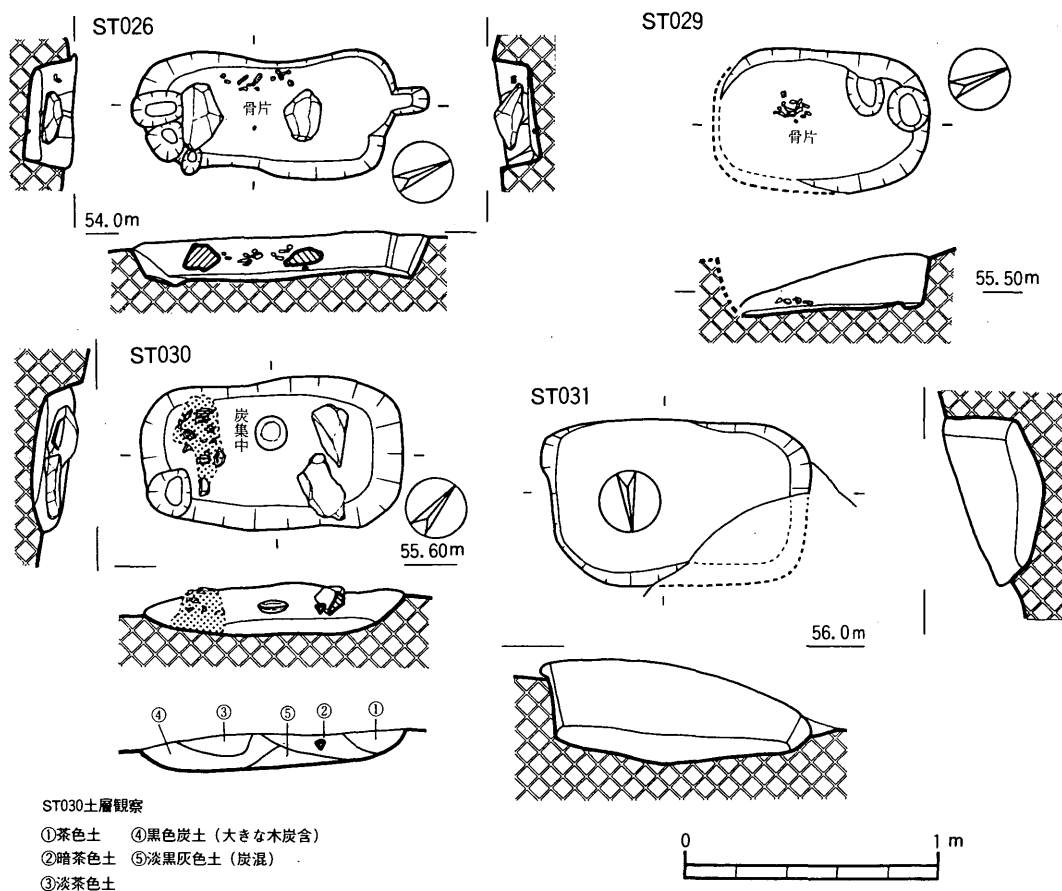


Fig.16 火葬施設実測図(1)

2つ（うち1つは須恵器窯の置台に用いられていた粘土塊を転用）南北に配し、棺台とする。棺台付近からは炭化物が多量に検出され、同時に焼骨片も集中して確認された。なお骨片は北側棺台石の下面からも検出されている。焼壁の遺存はなかった。人骨鑑定の結果（Ⅳ参照）から成人骨と幼児骨が混在して遺存していたことが判明した。

S T 029 南小口部および東壁の一部を失っているが、0.85m×0.55m程度に復原され、深さは0.20mを測る隅丸長方形のプランを呈する。北小口付近に浅い小ピット2つをもつ。壙内中央やや南寄りに焼骨片が集中して検出された。炭化物は壙内全面にみられたが、焼壁は確認されなかった。

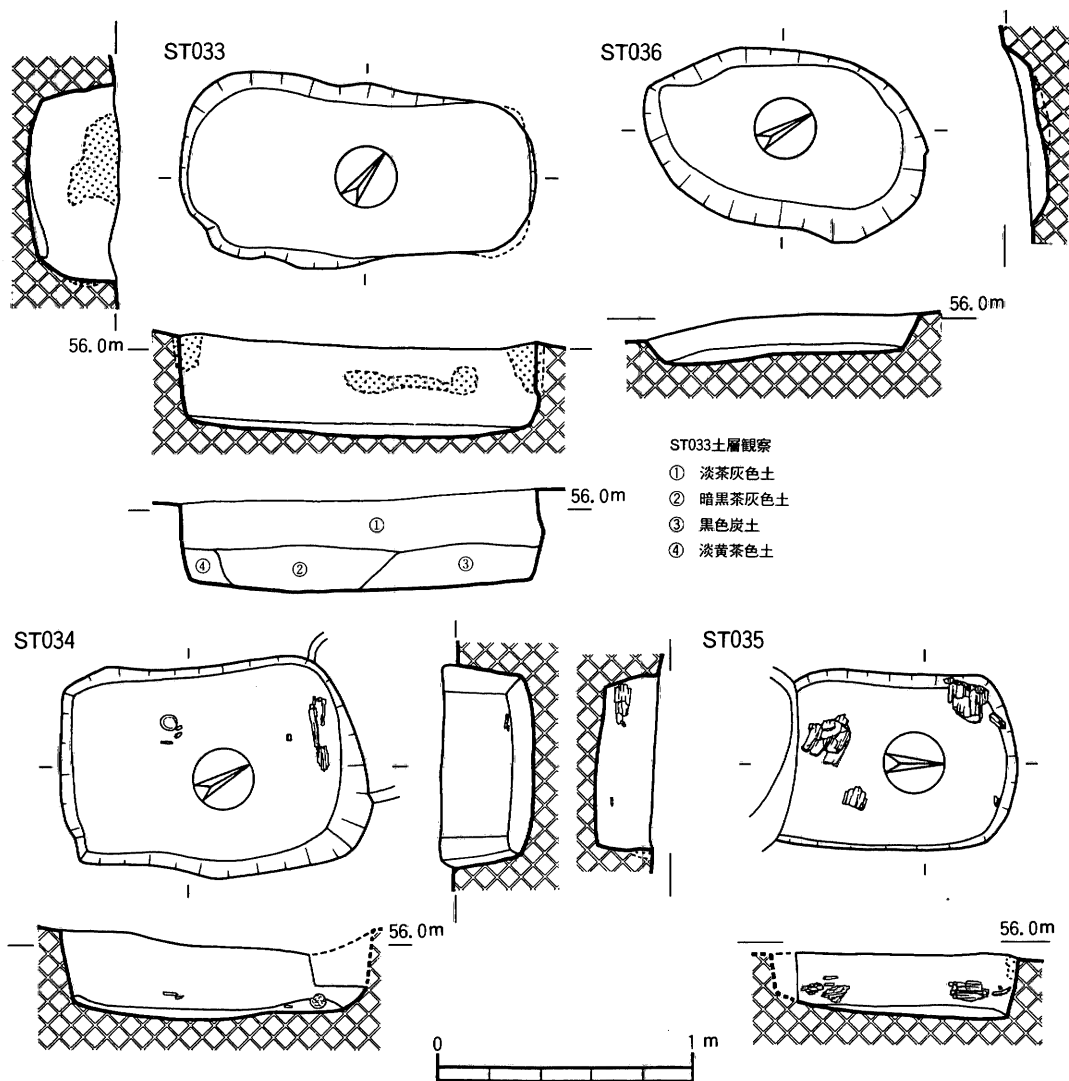


Fig.17 火葬施設実測図(2)

S T 030 1.05m×0.6m、深さは0.2m。隅丸長方形を呈する。壙内北東寄りに底よりも若干浮いた状態で棺台とみられる0.25m程度の石が2つ検出された。南隅には浅い小ピットが確認され、石と対応するかのように西南側の小口には5cm内外の木炭片がかたまって検出された。壙内の埋土は底部の大半が黒色炭層で覆われており、棺台はその上に乗る状況を呈している。焼壁は確認されなかった。なお壙内中央やや北寄りに正位ではあるが若干内傾した状態で土師器坏1点が埋納されていた。

S T 031 北西隅を株の攪乱で失うが、1.02m×0.67m、深さ0.35mを測り隅丸長方形を呈している。埋土は大きく2分され下層は黒色炭層、上層は茶灰色土である。東小口の上部が固く焼けているが、下半（黒色炭層部分）は焼けていない。焼壁は約3cmの厚さに及ぶ。

S T 033 1.4m×0.75m、深さ0.35mを測り隅丸長方形のプランを呈する。長辺はいずれも焼壁の崩壊による凹凸が目立つが、両小口は焼壁がよく遺存しておりその厚さは2cmに及んでいる。焼面は各壁中位以上に認められ、下半および床面には認められない。埋土は上下に大きく2分され下半のほとんどが黒色炭層で覆われ、上層は淡茶灰色土で埋まる。上下の層の接する位置が焼壁の遺存下位にほぼ一致する。SK015を切っている。

ST034 1.25m×0.85m、深さ0.30mを測り隅丸長方形のプランを呈する。埋土の状況はSX033に近似する。焼壁は西壁のごく一部に遺存しているのみであるが、厚さ2cmに及んでいる。壁面下位および床面は焼けていない。壙内からは木炭片が多量に検出されているが、北小口付近に転落しているものは径約6cmを測る棒材の炭化したものとみられる。骨片は散乱した状況でごく少量検出されたのみである。遺物は壙内中央やや西よりに土師器小皿1点を検出した。正位であり火化後の埋納と判断される。S T 035及びS K 015を切っている。

S T 035 S T 034に切られ南小口部分を失っているが、1.0m程度×0.7m、深さ0.25mを測り隅丸長方形のプランに復原される。遺存する3面の壁の一部はいずれも焼けており、特に東壁は著しく約5cmの厚さに及んでいる。壁面下位および床面は焼けていない。壙内には大きな木炭塊が南北の両小口付近にまとってみられ、丸太材であるならば径15cm以上に復原される。埋土中より若干の焼骨片と土師器坏bの断片を検出したにとどまる。S K 015を切っている。

S T 036 1.15m×0.7m、深さ0.15mを測り不整の長円形を呈している。埋土中より鉾滓片5点を検出した。

S T 019 S T 026の東北方にあり崩落著しく、本来の形状は不明である。検出時の上面で1.1m×0.5mを測ったが、壙内下半にみられた黒色炭層の幅はさらに広く、残存していた焼壁の下にまで及んでおり、当初は0.7m程度の幅をもっていたものと推量される。焼壁は当初の位置を保たず内側に融離して傾き、調査中に崩落した。深さは0.4m程度であった。出土遺物はなかった。

②出土遺物

ST 030出土土器 (Fig.18、Pla.11、別表)

土師器

坏 b (1) 口径12.6cm、高さ2.7cmを測る。体部はヨコナデ、底部内面はナデ調整される。底部は糸切りされる。

ST 034出土土器 (Fig.18、Pla.11、別表)

土師器

小皿 b (2) 口径6.6cm、高さ1.4cmを測る。体部はヨコナデされ、底部は糸切りである。ST 034の供献土器である。

これらの土器は火熱をうけておらず、火葬後に供献されたものであろう。

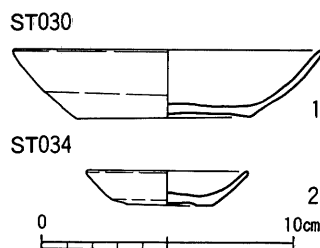


Fig.18 火葬施設出土土器実測図

(4)土壌墓

①遺構 (Fig.19)

土葬墓に対し確実に造営時期を異にするものとそれに類似する形状のものを指し、ここでは便宜上土葬墓とは区分して報告する。

ST 014 SX 001の南東隅付近にあるが、この遺構が先行する。主となる墓壙は、2.07m × 1.05m、深さ0.65mを測るやや歪な長方形プランを呈している。壙内は一部段状を呈していて内底はかなり歪んだプランとなっている。主体西側は尾根部にあたり、長さ2.75m前後のテラスを2段造っていたものとみられるが、上面の大半はSX 001造営時に手を加えられている可能性が強く、本来の形状は知り得ない。主軸は磁北に対し約32° 東に振っている。埋土中から須恵器蓋、坏、長頸壺、鉄釘を検出したが、鉄釘は墓壙最上面に1点検出されたにとどまり、本来この遺構に伴うものであるかは疑わしい。

ST 017 ST 014と尾根を狭んで対称的位置にあり、両者はかなり近い時期に造営されたものと推量される。2.5m × 1.1m、深さは0.75m。不整長方形を呈し、東西両壁には幅0.1m ~ 0.2mの小さなテラスがみられ、2段掘りの墓壙であったことを窺わせる。内底に浅い小ピットが検出されているが性格は不明である。主軸は磁北に対し約1° 東へ振る。遺物は埋土上位から赤褐色を呈する土師器小片を採集したにとどまる。

ST 032 尾根斜面を長さ3.5m、幅1.4m程度造成し、それによって形成された平坦面に不整長円形の墓壙を穿っている。墓壙は2.65m × 0.9m、平坦面からの深さは最大0.35mを測る。墓壙底は軽い段状を呈し西側に至るにつれ高くなる。主軸は磁北に対し約85° 東へ振っているが尾根筋にはほぼ平行している。遺物は検出されなかった。

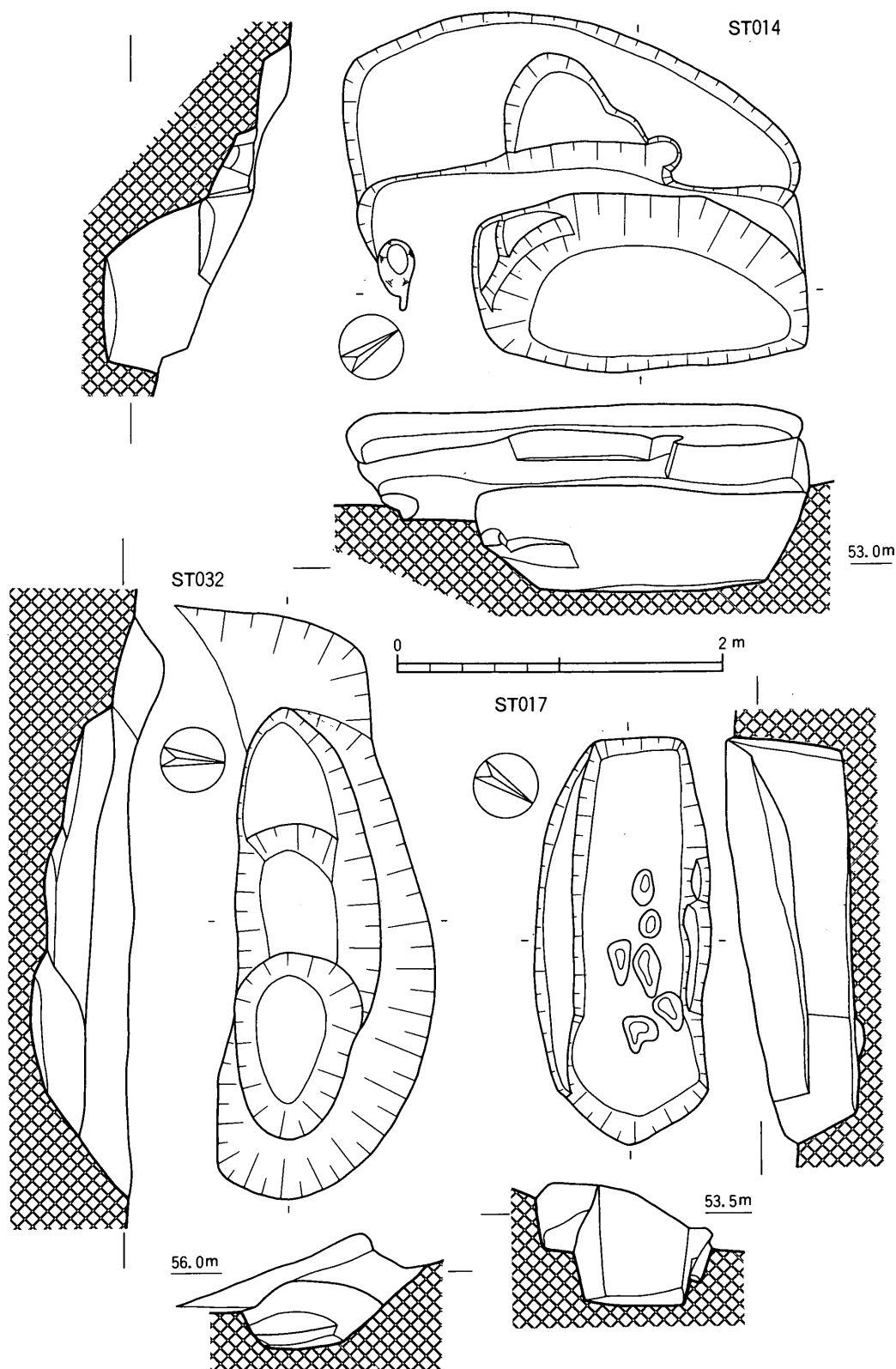


Fig.19 土壤墓実測図

②出土遺物

ST 014出土遺物 (Fig.20、Pla.10、別表)

全て埋土中から検出されたものである。

須恵器

坏蓋 c 1 (1・2) 口径15.6cm・16.2cm、器高2.1cm・1.8cmを測る。天井部は回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ、天井部内面はナデ調整である。

坏 c (3・4) 口径13.2cm・13.4cm、器高4.4cm・4.7cmを測る。3の底部外面は回転ヘラケズリ調整を行なうが、4については明らかでない。

長頸壺 (5) 高台部を失っているが、口径9.0cm、現存高14.2cmを測る。頸部は焼け歪みのため図のようにやや傾斜して取り付く。肩部上面にはごく浅い三条の櫛描波状文を施す。体部外面下半および底部外面は回転ヘラケズリ調整、他はヨコナデによっているが、頸部の接合部内面には指圧痕が顕著にみられる。頸部はST 014の埋土中から検出されず、ST 019やST 026の存在する付近の東斜面表土中から発見され、埋納前に頸部を打ち欠いて廃棄した可能性が考えられる。

鉄製品

釘 (6) 長さ7.6cm、頭部幅1.1cmを測る。先端が若干折れ曲がる。

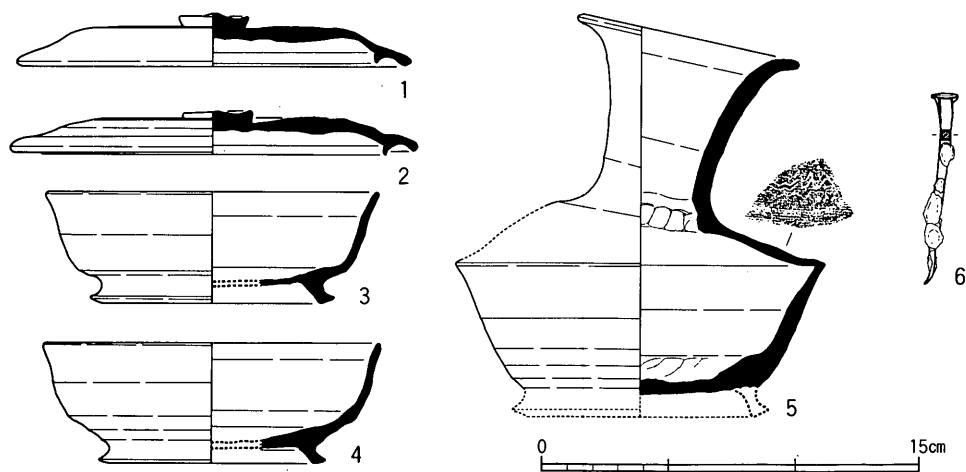


Fig.20 ST014出土遺物実測図

(5)窯跡 (Fig.21)

東調査区中央付近の北西斜面中位に2基検出されたが、いずれも崩落により大破しており窯体の一部を調査し得たにとどまる。

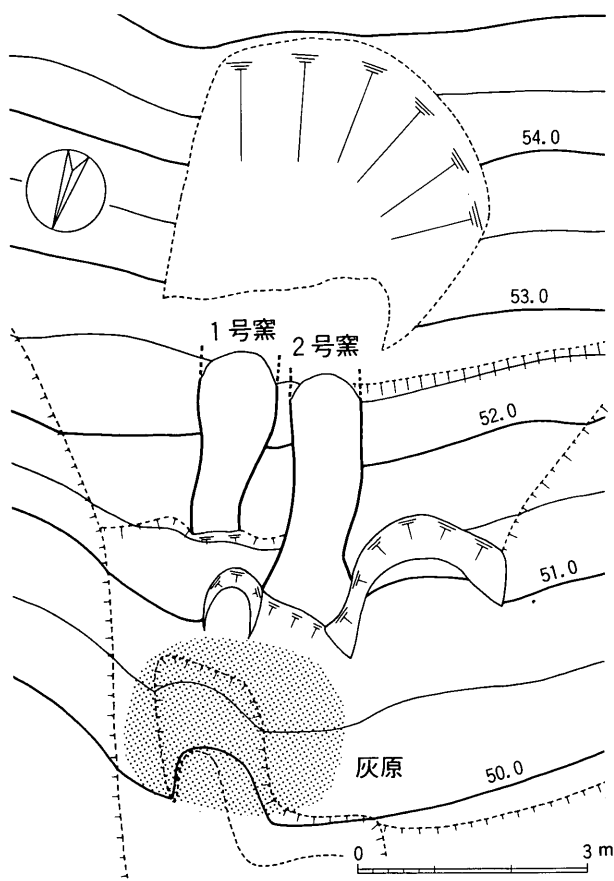


Fig.21 1・2号窯跡周辺地形測量図

1号窯跡

①遺構 (Fig.22)

窯体残存長2.25mを測り、地山を削り抜いて構築したとみられる地下式無階無段登窯である。焚口方向をN 8°05'Eに向け、丘陵の等高線にはほぼ直交している。崩落が著しく天井部はもちろん焼成部上半および煙道部、焚き口の一部を失っている。

焚き口 窯体北端で窯壁が急に広がる部分付近と推定される。床幅は約0.7m程度とみられる。

燃烧部 焚き口との境から傾斜変換部までの約0.3mが燃烧部とみられ比較的平坦である。床幅は0.55mで東側の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

焼成部 燃烧部から約1.0m付近までの傾斜角は約20°、中位以上では約40°と急である。床面最大幅は約1.0mで焼成部に下るにつれ徐々に狭くなる。

床面には粘土塊を用いて置き台としていたようであるが、原位置を保つものはない。

各部とも床面の修復は認められなかった。

②出土遺物

床面出土遺物 (Fig.23、Pla.12、別表)

床面付近で検出したものを指し、焼成時の旧位置を保つ資料は皆無である。遺物は全て須恵器である。

坏蓋 c₃ (1~4) 口径13.8~15.5cmで、4は口縁端部がやや長めの三角形を呈する。3は明瞭な三角形を呈し口縁内側にシャープな段がつく。1、2は大きくやや不明瞭な三角形で口縁内側の線はやや鈍い。1は天井部にヘラ削りの痕跡を認め難いが、他は丁寧なヘラ削りを施す。全体部はヨコナデし、内面はナデを施す。つまみはいずれも扁平なボタン状を呈する。

大蓋 c₃ (5) 口径19.2cmで、口縁端部は明瞭な三角形を呈する。天井部はヘラ削り、体部

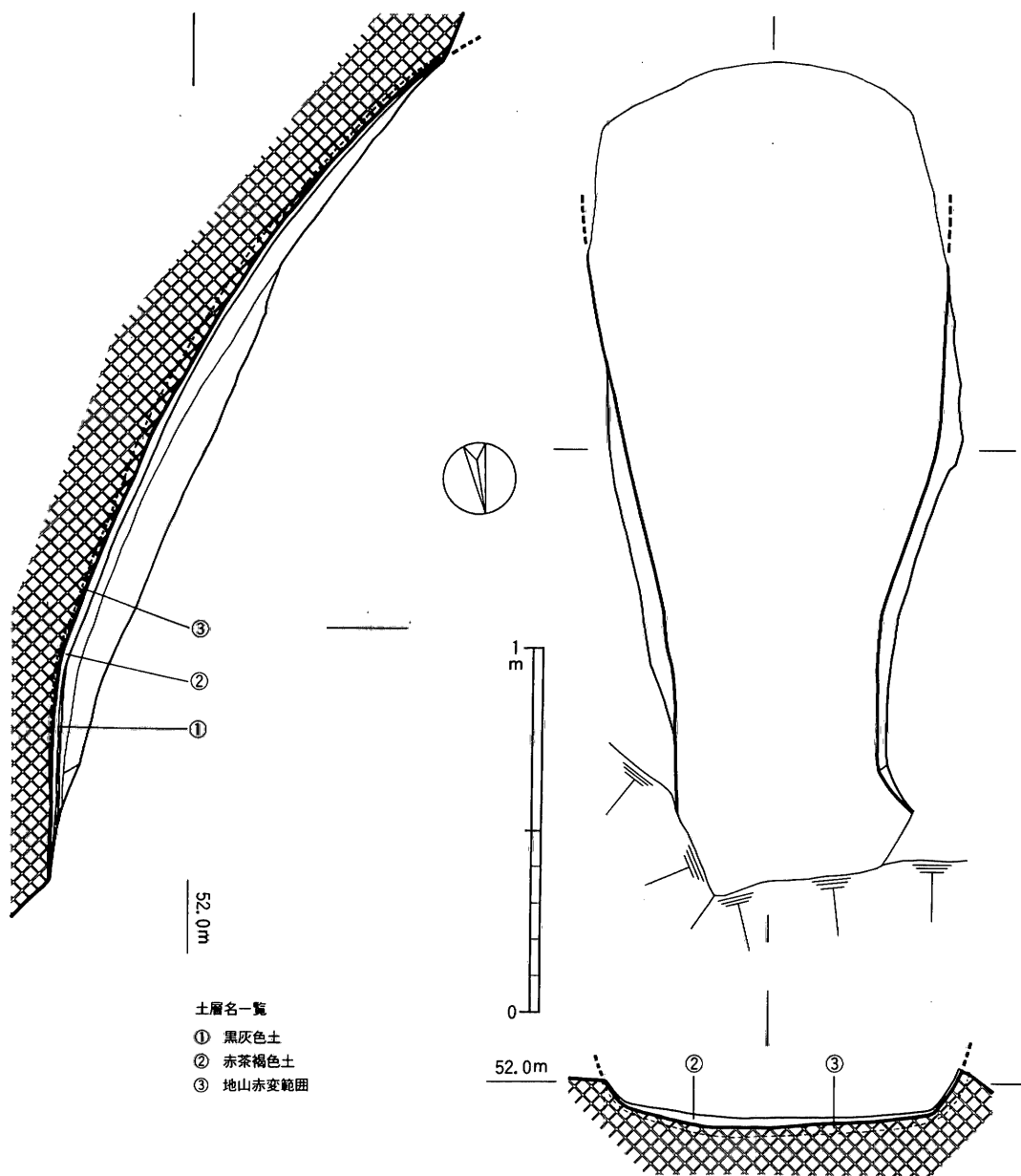


Fig.22 1号窯実測図

はヨコナデ、内面はナデを施す。

坏a (6) 口径13.2cmで、わずかに内彎気味に立ち上がる体部を有し底部と体部の境は明瞭であるが底部にやや丸味を残す。底部外面はヘラ切り未調整。

坏c (7) 口径12.8cmで、底部と体部の境は明瞭であるが底部にやや丸味を残す。高台は断面四角形で低くわずかに外反するがシャープさを欠く。

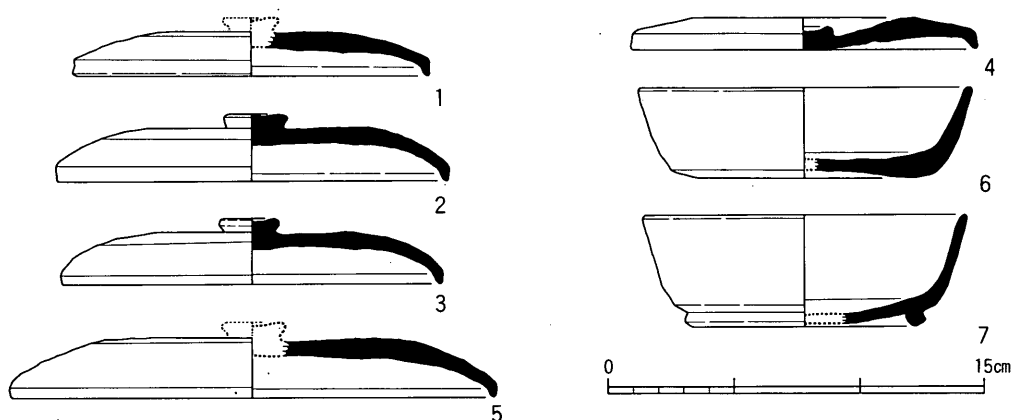


Fig.23 1号窯跡床面出土土器実測図

埋土中出土土器 (Fig.24、Pla.12、別表)

全て須恵器である。

坏蓋 c₃ (1～3) 口径14.6～15.6cmを測る。1の口縁端部は下方へ長めに折れわずかに外反気味である。3の口縁断面は明瞭な三角形を呈する。2は大きく不明瞭な三角形を呈する。2、3は天井部をヘラ削りされ、1はヘラ切り未調整のままであり、つまみが他に比べ扁平、大型である。

坏a (4) 口径13.8cmで、底部外面はヘラ切り未調整。体部との境は明瞭であるが底部端は丸味を残す。

坏c (5) 口径13.8cmを測り底部と体部の境は不明瞭で丸味をおびている。高台は太く台形状を呈し、あまり高くはない。

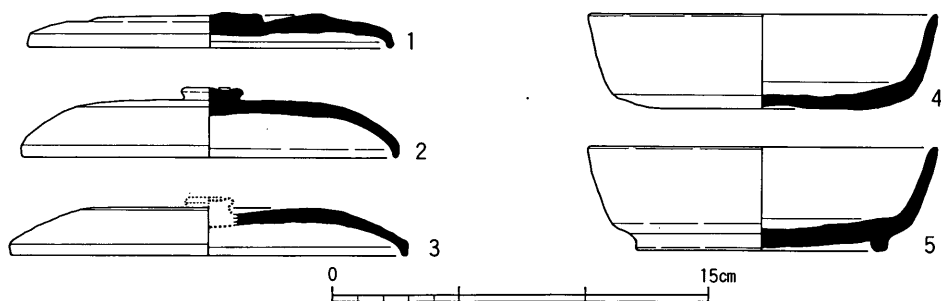


Fig.24 1号窯跡埋土中出土土器実測図

2号窯跡

①遺構 (Fig.26)

窯体残存長2.5mを測り、1号窯と同じく地山を削り抜いて構築されたとみられる地下式無階無段の登窯で、焚口方向をN14°32'Wに向ける。本窯跡も崩落著しく天井部、焼成部上半お

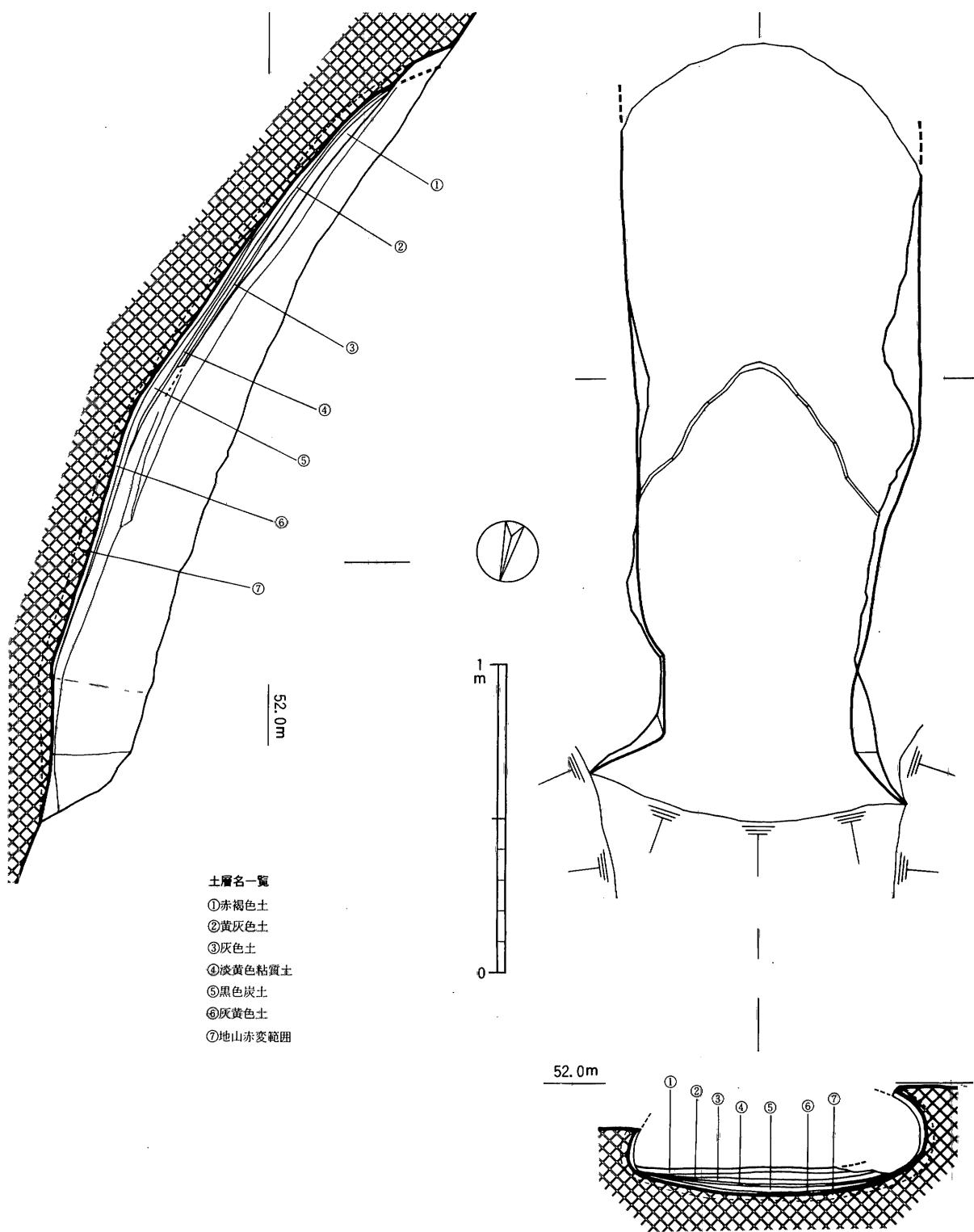


Fig.25 2号窯跡実測図

よび煙道部を失っている。

焚き口 灰原方向に急に広がる部分と考えられ、床幅は約1.0mとみられるが床面が崩落し、壁面の焼痕から推定し得るにとどまる。

燃焼部 焚き口との境から傾斜変換部までの約0.25mとみられ、床幅は0.61mを測り東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

燃成部 燃焼部から約0.8mまでの傾斜角は約20°、中位以上は約35°の傾斜をもつ。床面最大幅は約1.0mで燃焼部方向に下るにつれ徐々に狭くなる。床面は1回の修復が認められるが、中位以下は崩落しているため燃焼部まで手を加えていたか否かは明らかでない。

②出土遺物

床面および埋土中からは顕著な遺物は検出されなかった。

1・2号窯灰原

①遺構

1・2号窯の下方に若干残存していたが、表土との区別が困難な程に薄く、また各窯跡から連続して延びる灰層も認められず、窯体崩壊時に同時に谷へ転落した可能性がある。両窯のいずれに伴う灰原かは決定できず、また両窯の遺物が混在している可能性が高いため、遺物は以下に一括して報告することとした。

②出土遺物 (Fig.26・27、Pla.12、別表)

全て須恵器である。

坏蓋 c_3 (1~20) 1の口縁断面は外反気味につくり、且つやや長めの c_2 に近いもので、口径14.5cmを測る。ツマミの形状は他に比べ大型で低い。天井部はヘラ削りを施すがかなり粗雑である。体部はヨコナデ、底部内面はナデを施す。量は少なく1点のみである。2~14の口縁断面は明瞭な三角形を呈する一群で内面にシャープな稜線を有する。口径13.1~15.0cmを測る。天井部中位以上をヘラ削りし、内底はナデ、他はヨコナデを施す。15~20は口縁断面が三角形を呈するものの内面の稜線がやや不明瞭な一群で、口径14.0~15.8cmを測る。調整は2~14と大差ない。この2~20のなかでは、6・18~20がわずかに端部を長めに作る。

大蓋 c_3 (21~26) 21・22は口縁端部が小さく丸味をもった一群で口径18.0~18.1cmを測る。23は端部を三角形に作るもので口径18.6cm。24~26はやや長めの三角形に口縁端部を仕上げるものである。調整は全て天井部中位以上がヘラ削りされ、内面はナデ、他はヨコナデを施している。

坏 a (27) 口径13.2cmで内彎気味に立ち上がる体部を有する。底部外面はヘラ切りされ、体部と底部の境は明瞭であるが底部端に丸味を有する。底部内面はナデ、体部はヨコナデを施す。

坏 c (28~40) 28~33は体部と底部の境付近を丸く仕上げる一群で、口径13.0~14.2cmを

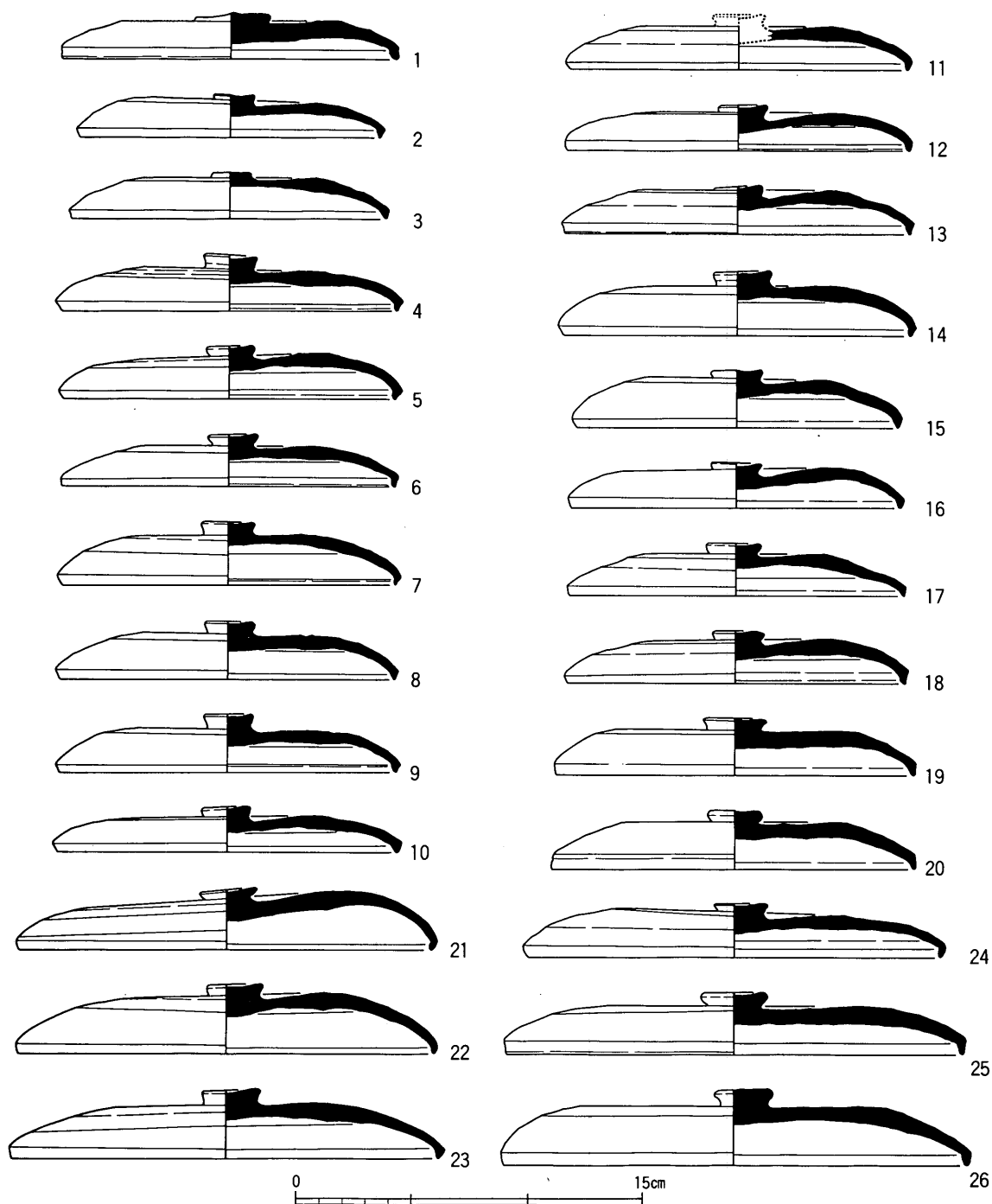


Fig.26 灰原出土土器実測図(1)

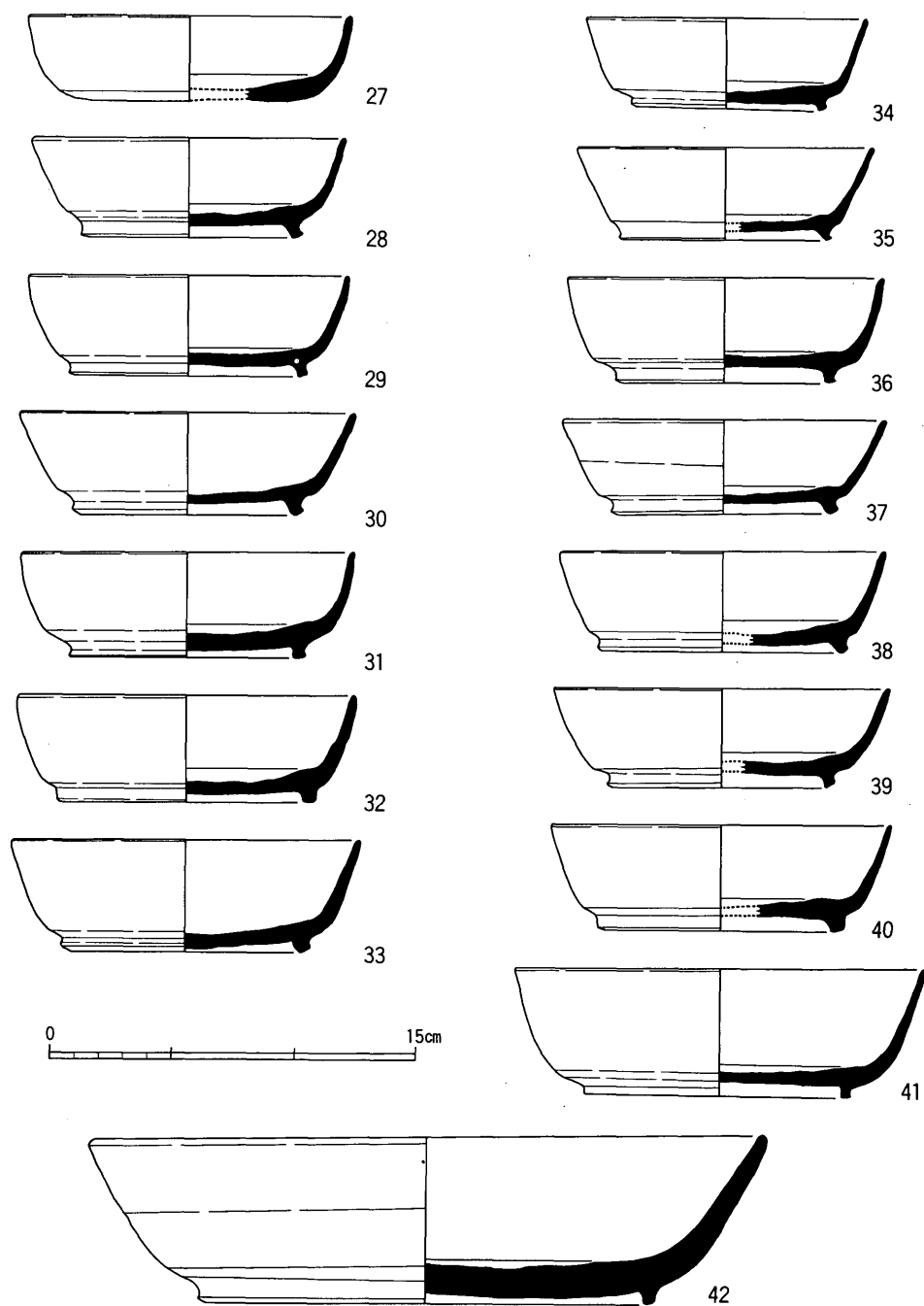


Fig.27 灰原出土土器実測図(2)

測る。28～31の高台は外反気味に作り、32、33は台形または四角状を呈する。底部内面はナデ、底部外面はヘラ切りのままで、他はヨコナデを施す。29の体部下位はヘラ削りの痕跡を残しているところから、この形態を有する他の坏も体部下位にヘラ削りの施されていた可能性を推測し得る。34～40は体部と底部の境が明瞭な一群で、口径11.6cm～14.0cmを測る。高台は端部外側を跳ね上げ気味にするものが多く、40のみ台形状を呈する。底部外面はヘラ切り未調整で、底部内面はナデ、体部はヨコナデされる。

大坏c (41) 口径17.0cmを測り、高台の断面は四角形を呈する。体部下位は丸味をおびておりヘラ削りされた可能性が強い。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ、体部はヨコナデされる。

盤c (42) 口径28.0cm、器高6.8cmを測る。高台は端部外面をわずかに跳ね上げ気味に作る。底部外面及び体部下位は回転ヘラ削り調整であるが、底部外面の中央付近は未調整である。体部はヨコナデ、底部内面はナデを施す。

(6)その他の遺構と遺物

①遺構

SK 015

尾根基部近くの頂部付近に造られた不定形の土壇で、南北4.1m東西4.6mで中央がやや深くなっている。埋土中から須恵器坏cの小片と坏蓋c₃を検出した。火葬施設3基がこの土壇を切っている。

②出土遺物

SK 015出土遺物 (Fig.28、Pla.11、別表)

須恵器

坏蓋c₃ (1) 口径15.5cm、器高1.7cmを測り口縁端部を三角形に作る。体部はヨコナデ調整されるが、天井部外面はヘラ切り離しの後粗雑なナデ調整でおわる。

表土出土遺物 (Fig.28、別表)

土師器

坏a (2、3) 2は土師器坏aで口径11.8cm、器高2.5cmを測る。底部外面に板状圧痕はみられない。3は土師器坏aで口径12.4cm、器高2.5cmを測る。直線的に立ち上がる体部はヨコナデされ、坏bに近い形態を呈している。2・3とも糸切りであり、尾根上の表土中から採集した。

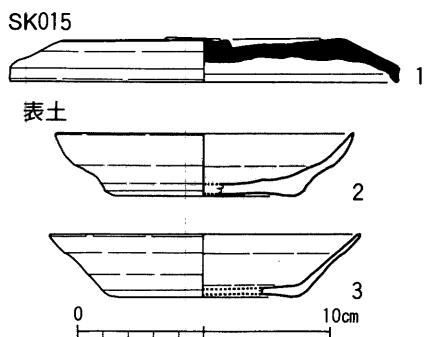


Fig.28 SK015・表土出土土器実測図

Ⅳ 篠振遺跡出土人骨について

永井 昌文

はじめに

人骨は下記の5体として鑑定を委託された。

S T 026 S T 035

S T 029 S T 043

S T 034

以下簡便のために末尾2桁の数字のみをもって人骨を区別する。

上記のうち43号人骨1体のみが土葬墓人骨であり、他の4遺構のものは火葬人骨である。

土葬墓人骨43号

保存状態：頭骨は墳底北西隅より出土した。残存していたのは前頭部より上顔面にかけと、両側の側頭骨、下顎骨などである。四肢の遺存度も頗る不良で、墳底南寄りに出土した長骨のものと思われる少量の骨片群は、一部が大腿骨体と判断せられる程度で、他はほとんど部位の同定が不能であった。

推定性別： 男性

眉弓および乳様突起は発達して居り、眼窩上縁は厚く、前頭部の膨隆は弱い。

推定年齢： 熟年、50代ならん。

ほとんどの歯槽が閉鎖し、全般に歯槽突起の萎縮が著明である。残存する下顎右側第1大臼歯、上顎右側第1・第2小臼歯の咬耗度はMartinの3度である。

火葬骨

個々の墓墳より得られた骨片はいずれも極少量である。しかも火葬骨に関する研究は世界的に見ても少ない。(参考までに主な文献を後記する。)それというのも、火力によって骨は収縮、亀裂、歪曲を来し、その変化が定型的でない場合が多いために研究対象として取り上げ難い面があるからであろう。

篠振遺跡の火葬骨全体について言えることは、残存部がほとんど、長骨々体の緻密質の厚い部分が縦に割れた細片で、せいぜい3・4cmの長さのものである。全部と言ってもよい位、これらの骨片の部位同定は不能であったので、わずかに知り得たことのみを下記する

1) 4遺構の火葬骨はすべてその太さから見て成人のものらしい。

2) 26号遺構では、推定全長7cmほどの右側尺骨が幸い残っており、他にも細い骨が見受けられるので、乳児骨が混在しているようである。

3) 発掘時、第26号成人骨中の長骨片に見られ、骨長軸に対し横走し、刀傷かと疑われたものは、明らかに火力によって生じた裂線で、深さは異なるがこれに並行な裂線が多数見られる

4) 丹念に見たが、どの火葬墓にも頭骨片と見られるものを見出し得なかった。腐蝕して全く偶然に残存しないのか、判然としないので、今後の火葬墓発掘に俟ちたい。

文献

1) 池田次郎「出土火葬骨について」『太安萬侶墓』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書、第43冊) 1981 所収

2) Herrmann, B. On histological investigations of cremated human remains. *Journal of Human Evolution*, Vol. 6 P101~103, 1977.

V 調査のまとめ

1. 西調査区

段状のテラス SX 010の平坦面に検出された6基のピットは、そのうちの1基 ST 005が火葬墓と判明したことから、すべて墓地に関係する一連の遺構である事が濃厚となった。遺構はとくに顕著な上部施設も遺存せず簡単なつくりのものである。木製蔵骨器や ST 005のように（白）綿などにくるんで火葬骨を埋納する場合、これらが腐朽してしまうと、火葬墓として検出されることは困難となる場合が多い。また、火葬墓であると判断できてもこれら小遺構は炭・灰以外に遺物を含んでいないことが多く、被葬者の社会階層を捉える資料に欠く事がある。今回、西区に検出された墓地は遺構の構成状態や範囲、SX 010の埋没時期などから推しても長期に及ぶとは考えにくい。遺構の中では SX 009のように明らかにピット内で火をたいているものがあるが、火葬所とするにはあまりにも規模が小さい。墓前祭など他の用途の使用も考慮されよう。火葬墓の構成順位については今ひとつ明確さを欠くが、テラス両端よりも中央部に造営された SX 006、007、008などに先行性を考慮できうるかもしれない。ST 005出土須恵器は8 C 中・後半の一特徴を有するし、SX 010埋土出土土器は8 C 代のもので9 C に下るものはない。また、墓地群のやや下方に検出された遺物包含層 SX 004の土器片も8 C 代のものである。以上から、これらの墓地群は8 C 代に造営されたものと推定できる。ST 005の被葬者は鍔帯、佩飾の使用、さらに奈良時代であるという点を考慮すると、大宰府に關係する文・武官の1人である可能性も濃厚となる。ST 005以外の他の火葬墓についても一群の近親者の墓とみる事がより自然であろう。令制では官位により鍔帯の形態や大小、材質などに規定が設けられていたようであるが、用いる公服（礼服・朝服・制服）または私服、文官・武官などの違い、佩飾の内容の差、儀式的なものと私的な趣向、存命中と死亡時などの各々の場面によって、異なる場合もありえるので ST 005被葬者の官位の位置づけなどについては慎重を要する。とくに今回の場合は、銅鍔は焼けているのでより一般的な官人に使用された黒漆塗りの鳥油腰帯、あるいはより高級官人に多用された金銀装腰帯か基本的な分類を決しえない点が残る。しかし類例品の統計処理によってはいずれかに判断することが今後、可能かもしれない。さて、今回の調査や宮ノ本1次、2次調査で明らかとされたように、大宰府西辺の低丘陵地帯に発見された8、9 Cの墳墓群は、それぞれ数基ずつの小群とはいえ、一般墳墓とは区別される内容を有している。これらの被葬者は、大宰府に登場する有位、無位を含めた官人の一人あるいは一族であった可能性が高い。平城京と京外に所在する墳墓との位置関係に認められるように、大宰府郭外の西辺部は8、9 Cにおける政治的階層の一葬地として意識されていたと思われる。

2. 東調査区

(1) 墳丘、土葬墓、火葬施設

① 造営時期

土器の年代

SX 001周辺出土土器・銅銭 Fig 12-12・13はSX 001造営時期とは無関係と思われ除外される。残る土師器小皿a・b、坏a・bは年代を推定する手がかりとなるが、これらの出土状態は点在しているため、すべて一括とみることはできない。しかし数型式に分類は可能である。以下の型式名と法量関係・統計値については『条坊Ⅱ』付編を参照されたい。

- 小皿 a 3 大*SK 601～SX 1200型<13C中頃～14C中頃>
- 2 大 SK 830～SD 1805型<1300年前後～1500年前後>
- 1 大 SK 1200～SD 1805型<14C中頃～1500年前後>
- 小皿 b 4 大 SK 601～SK 624型<13C中頃～14C後半>
- 坏 a 5 大 SK 601～SK 830型<13C中頃～1300年前後>
- 6 大 SK 830型<1300年前後ないし後出するタイプ>
- 7 大 SK 830～SX 1200型<1300年前後～14C中頃>

これらの土器は個々をみた場合、13C中頃まで遡りえるが、全体的には大SK 830型に帰属させることができる。

坏b 8、9、10、11の特徴は回転糸切りで底径は小さく、外上方へ開く体部を有する。体内外面、底部内面は連続した横ナデ調整で、横ナデが強い凹凸をなすものもある。内面にナデを行なうことは少なく底部外面の板状圧痕もないものが多い。表2の遺構に坏bの出土例がある。

坏bの初現は大SX 1200型に認められるが数は少なく、調整などの面で上述したものと異なる。ここで示されるものは現在のところ大SX 1200には出現していないタイプのものである。篠振SX 001出土坏b 8、9の法量は口径10.7～10.8cm、器高2.7～3.2cm、底径4.8～4.9cmでこれに近い法量の坏bは表2の○印を付した遺構、土層である。とくに大SD 1805からは1500年前後の年代が与えられる。SX 001出土銅銭「永楽通宝、初鑄1408年」と坏bとの共伴関係は明確には押えにくい、銅銭がこの坏bに関連するものであればこの土器に1408年以降の年代を与えることが可能となる。したがってこれらを整理すると上限15C初頭、下限16C初頭に坏bの年代が考慮されることになる。しかし指標とした表2の遺構、土層では土器点数は少なく、また一括資料として捉えうる遺構にめぐまれていないので編年的に細分化できない。この点は将来に追加資料を待たねばならないが、法量変遷、器種構成、同一器形の大小関係などの

*P.41参照

点からみて数型式に分類が可能と思われる。

次に ST 030、013出土土師器坏 b は表 2 の大57次暗茶色土層、大67次 SX 1663に近い数値を示す。年代的には、先に分析した SX 001の坏 b と同様に15C初頭～16C初頭と思われる。ST 023小皿 a、ST 034 小皿 b は 1 点という資料の制約上、帰属型式の推定を行なうことは困難をきわめるが14C後半以降にみてもよいと思われる。

墓地の造営時期

土師器型式から墓地の開始は14C初頭前後、終焉は16C初頭頃に求めることができよう。

遺構・土層	年 代	坏 b の 個体数	口 径 cm	器 高 cm	底 径 cm
○大70次SD1805	文亀元年(1501)木簡伴出	4	10.6 11.2 11.9	2.3 2.5 2.8	4.1 5.0 5.5
大28次SX521		1	11.6前後	3.2	4.6
大78次SD2115	16C代を下限とする	1	11.6	3.0	5.4
○大67次暗青灰色土	15C後半～16C前	4	10.4- 10.9-11.7-12.5 -	2.3-2.5-2.7	5.2 5.8 7.1
大67次SX1663		12	11.7- 12.6-13.1-13.6 14.4	2.9 3.1-3.3-3.5 3.8	5.5 7.1 8.4
大57次暗茶色土	上限15C前半～下限16C前半の 遺構を覆う層。永楽通宝出土	4	11.8- 12.2-13.2-14.2	2.5-2.8-3.1 3.2	5.8 8.2 10.6
大5次I層	15C前半～16C。永楽通宝出土	2	12	3	—
大33次SK624	(坏 a のタイプ)14C後半	6	10.8- 11.1-11.5-11.9 -12.0	2.6 2.8-3.0-3.2	6.3- 6.9 8.0
大102次SX2983	大SD1805型	1	11.8	3.0	5.0
大38次灰褐色土	14C前半以後、下記SK805 より 層位的に新しい	2	11.6- 11.75 -11.9	2.6- 2.65 -2.7	—
大38次SK805	14C前半のSB400より新しい	3	12.0- 12.15 -12.3	2.5- 2.65 2.8	—
○浦ノ城Ⅱ-3類	鎌倉末～室町		11.1- -12	2.8	5

表 2 坏 b の出土遺構・土層

土師器の統計値

本文中「口径10.8-11.5-11.7-11.9-12.4cm」と記録しているもので両端の数値10.8～12.4は計測値の範囲、 内の11.5～11.9は95%統計値、中央の11.7は平均値を示す。『条坊Ⅱ』では確立95%により計算した標式遺構出土土師器の法量表を載せているが、この表を参照して平均値の近い型式に比較しようとする土師器を同定できる。

②遺構の性格

墳丘遺構 SX 001にはそれを取り巻くように土葬墓が配されており、これらの墓は SX 001を意識しながら形成されたと思われる。こうした例は福岡県下をはじめ全国に多数見られるが、その墳丘は、新たに造営した墳丘ではなく前時代の古墳を代用としている場合が多いと推定される。福岡市干隈遺跡⁽¹⁾・穂波町日上遺跡⁽²⁾は火葬施設を主流にしながらも古墳を意識して配置されている。京都府前栲遺跡⁽³⁾では古墳の墳裾に石囲いを配する墳墓（火葬・土葬混在）が10基程みられて、こうしたタイプの墓地の好例と言える。

墳丘を独自に構築しその周辺を墓としたものでは太宰府市坂本大正府 SX 085⁽⁴⁾、奈良県地蔵山墓地跡⁽⁵⁾が知られる。太宰府例は周囲が土取りにより詳細を知り得ないものの土壙墓の存

在が確認され類似の遺構と看做される。地蔵山墓地跡の墳丘は、13世紀中頃以降に構築され、その周辺で16世紀頃まで火葬が行なわれ、それ以後も石塔や石仏の造立が墳丘を意識した形で続いている。

参考例として現在もなおそうした形で続いている墳丘を掲げると、奈良県中ノ川墓地⁽⁶⁾がある（Fig.29）。小丘（旧形は不詳）の周囲に墓地（埋め墓）が広がり、小丘上には石造五輪塔（14世紀後半頃）を据える。この場合、墓地の中心たる存在として五輪塔が位置付けられる。奈良盆地および東山中付近には旧位置を保つものは少ないものの墓地の中心的存在として建立された可能性が高いと考えられる五輪塔が多く現存している。

これらのことから SX 001 は篠振遺跡の中世葬地期における中心的役割を担い、墳墓群の標式としての性格を保っていたものと推定される。墳丘がなぜ中心的役割を担うに至るかにについては不明な点も多いが、中ノ川墓地のように塔婆を建立しているもののあることを想定すると、建築物としての塔婆自体を当初から保有しなくとも塔婆というものの初現を辿ることによって、墳丘の意義は自ずと知られるのではないかと考えている。

さらに篠振遺跡の場合は、墳丘斜面中位付近に多くの古銭の出土があり、併せて鉄刀子も検出している。古銭の多くが墳裾の土葬墓群よりも高所に位置し、墓埋土中からの流出は考えられないため、古銭などの出土位置には別の意味を考える必要があると思われる。可能性として考え得ることを書き並べれば、まず墳丘に対する供献が想定される。墳丘自体を先述のように塔婆的なものとして捉えることによれば、それに対する供献として意義付けされよう。ただし鉄刀子については問題が残されると言える。次に『六道絵』や『飢餓草子』に見られる葬地の光景の具体例と想定した場合、S X 001中位の平坦面付近に古銭出土地点が集中し、且つ鉄刀子も同様の位置の検出であることを併せると墳丘裾部に土壌中へ埋葬されることのなかった屍体が、簡素な盛土程度か薦に包まれるような放置的状况で葬むられていたことの可能性を検討する必要がでてくると言えよう。京都のような特殊な都市における墓地の風景と理解されている『飢餓草子』の世界が、地方都市大宰府においても見られた可能性が考えられる。中世の葬地を考えるうえでの今後の大きな課題としておきたい。

次に、火葬施設として捉えた一連の焼土壙群について所見を述べておきたい。

当該遺構は、規模の上から長さ0.8～1.1m、幅0.4～0.7m程度の小型の一群（A群、S T 026・029・030・031）と長さ1.1m～1.4m、幅0.7m以上のやや大型の一群（B群、S T 033・034・035・036）の2群に分けられる。

A群についてみると土壌底部付近に石を配するものが存在する。この石の性格は火化時における棺台の役割を担うものとみられ、石上に棺を安置し土壌底との間に空間を設定し通風を考慮したものであると考えられる。S T 030の場合は石が片方に寄っているが、これに対する側にやや大きめの木炭塊が検出されており、棺台の一部に木材を用いた可能性も考えておく必要



Fig.29 中ノ川墓地の光景（上・遠景 下・近景（財元興寺文化財研究所提供）

があらう。

またS T 026、030ともに石は炭層の上にのり床面に密着していない。この状況について考え得ることを列記すると、①複数回の火葬実施により、土壌内を整地して石を置き直している。②火葬実施中に棺材の転落や薪の挿入などにより2次的に石が動いた。③火葬終了後、土壌を埋める際に2次的に石が動いた。④火葬実施前に炭を敷きその上に石(棺台)を置いた。などを考えることができる。このうち②③については直接の証拠を見出すことは困難であるが、④については『吉事略儀』⁽⁷⁾の記事が参考になる。「鑑内敷=薦二枚-。其上敷=筵二枚-。其上積レ炭。々上積レ薪。」とあり、火葬の実施に先立ち土壌内に諸々のものを入れた事が知られる。ただしこの記事は平安時代後半頃の、しかも天皇や貴族の一部に用いられた葬法の一つであり④の裏付けとしては消極的であると言わざるを得ない。①については考古学的例がある。石を用いていないが火葬終了後の土壌内を別の土で整地し、新たな床面を形成したと判断されるものが太宰府天満宮第2次調査の2 S T 027⁽⁸⁾にみられ、整地前後の土層堆積状況から複数回の火葬実施を想定できる。また奈良県能峠遺跡⁽⁹⁾においても複数回の火葬実施を想定されている。このことから直接、篠振遺跡の例をこれに当てはめることは困難であるが、S T 026北側の棺台の石材下面に焼骨小片を検出していることと、同遺構検出の焼骨に成人骨・幼児骨の混在が認められたことを併せ考えた時、同一土壌内での複数回の火葬の実施は考えておく必要があるであらう。

以上のように現状での判断は難しく、今後の資料の増加をまって再検討する必要があるあらう。

さらにこの棺台の上に乗せられた棺について推定すると、棺台上面高における土壌の法量からして長さ約1 m、幅約40 cm程度のもの以下でないと壙内に収まらず、土壌四辺における通風や棺材の厚さを考慮すると内法はかなり小さなものになってしまう。この状況から伸展した成人用の棺は不可能であり、かなり窮屈な状況で折り曲げた屍体(座棺に近い状態)を納める棺を想定しておく必要があるあらう。

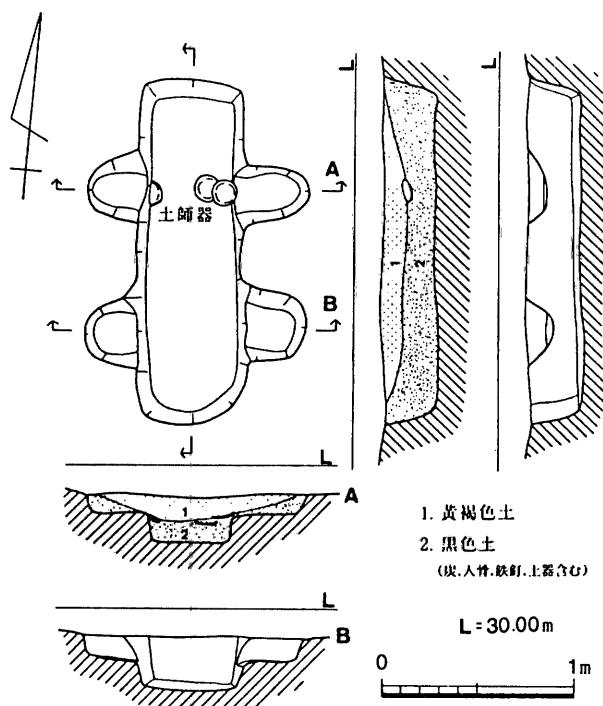


Fig.30 京都西陣町遺跡 SX13001

B群の場合は、S T 034・035に興味ある資料が遺存していた。とくにS T 035では土壙の両小口付近に大きな木炭塊が各々転落し、両者は床面より若干浮いた状態で検出されている。木炭塊から復原される材の大きさは、径または一辺が10～15cm程度のものになる。この状況は火化が進行した後に棒材が壙内に各々の位置を保ったまま転落したことを物語っていると思われ、壙上に棺台として掛木が2本架けられていたことを窺わせるものと言えよう。木材でも太いものであれば完全に燃焼するまでにはかなりの時間を要するであろうし、当面火化を実施するにあたってはこうした木材で充分機能したものと思われる。

こうした例を具体的に知れる資料として、京都府西陣町遺跡⁽¹⁰⁾のS X 13001 (Fig 30)があり、この場合棒材の固定を意図して両側に掘り込みを形成するが、角材や枝の残る自然木、あるいは丸太材にしても木片などで回転止めを施せば、特に掘り込みを作らずとも棒材を固定できるものと考えられ、S T 035はこうした可能性が大きいと思われる。

ここでこれらの遺構が展開される遺跡全体の景観について述べておきたい。

篠振遺跡の場合、S X 045を境として土葬墓群と火葬施設群の2群に明瞭に分離される傾向がある。こうした状況の具体的な意味付けは今後の課題としておきたいが、こうした光景は火化の風景を描写した絵画資料に近似するものを求めることができる。



Fig.31 火葬の風景 (註(11)文献から)

Fig 31の『善信上人傳絵』⁽¹¹⁾を仔細に検討してみると、絵の中心は火化の風景であるが手前に火化の終了したとみられる炭や薪の屑が集められたような状況が見え、火化地はこの一帯に存在したことを物語っている。さらに背後に目を向けるならば、小丘を挟んで五輪塔などの建ち並ぶ墓地の光景が見て取られ、小丘を境として明確に区分されていることが知られる。これは『親鸞上人絵伝』⁽¹²⁾に見られる火化の光景にも描かれ、当時の墓地の様相の一端が窺える。また遠景には街の存在を予想させる寺院の塔が見え、都市の見える丘陵上に葬送の場を設けたことも併せて知られるのである。こうした光景を具体的に遺跡の上で観察されたものが篠振遺跡ではないかと考えている。

「あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば……」と徒然草⁽¹³⁾に記述された街中からの葬地の景観は、ここ太宰府においても見られたものと思われる。

(2)土墳墓

三基確認したが時期を決定し得るものはS T 014のみである。S T 014はその出土土器から7世紀後半頃に造営されたものとみられ、大宰府成立期に近い時期の墳墓として注意され、過去の調査で大宰府周辺にこの時期の墳墓の発見された報告がないのと併せて、大宰府成立期における墳墓の立地や形状などの一端を知り得た点は意義深い。

(3)窯跡

1、2号の窯の須恵器は同一型式である。この須恵器の類似型式を周辺に求めると生産地では浦ノ原8号窯⁽¹⁴⁾（春日市）の一部、宮ノ本2、3号窯⁽¹⁵⁾があり、消費地では大85・87・90次S D 2340下層⁽¹⁶⁾、条2 S D 001⁽¹⁷⁾などの遺構出土例がある。須恵器の年代観については後2者の例が参考となる。

大85・87・90次S D 2340下層 「天平六年（734）、八年（736）」銘木簡を出土している。須恵器蓋c 1、c 2、c 3があり、c 2の割合は多い。c 3は多くはないが口縁部断面形は大きな三角形をなすものがある。坏cの高台は端部を外上方へ跳ね上げるものは少なく、断面四角形に近いもので、体部下半は丸味を有し底部と体部の境が不明瞭に近い。これは上述の蓋c 2・3とセットをなすものである。これらの土器は木簡の年代である8 C前半（第1・2四半期）に位置づけられる。その後大87・90次調査では上より後出型式と推定されるタイプのものが少数出土した。蓋c 3の口縁部断面は小さな三角形をなし、坏cは体部と底部の境が明瞭で角張るものである。そこでS D 2340は85次調査の時より若干下る8 C中頃に埋没年代を捉えた。

条2 S D 001 須恵器蓋 c 2・c 3 があり、小さな三角口縁をなす c 3 が少量入る。上記大 S D 2340 と類似するが蓋 c 2 の割合が減少するところから S D 2340 の後半に位置づけられ、8 C 中頃に近い年代と思われる⁽¹⁸⁾。

篠振 1・2 号窯須恵器は蓋 c 2 に近いものがごく少数で、大半は大きな三角口縁の蓋 c 3 である。小さな三角口縁をなす蓋 c 3 も少数あるが、三角形のつくりは小さいながらも明瞭である。また坏 c は条2 S D 001 に類似するものが多い。このことから条2 S D 001 と同じ 8 C 中頃に近い年代が与えられる。蓋 c 2 は古期の混入品とも思われるが、窯跡に関係するものであれば、8 C 前半頃に窯の操業開始期を求めることができる。

註

- (1) 井沢洋一『干隈遺跡』干隈遺跡調査会 1985
- (2) 酒井仁夫ほか『日上遺跡』（福岡県文化財調査報告書 第48集）福岡県教育委員会 1971
- (3) 戸原和人「前門 2 号墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第2冊-4』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982
- (4) 山本信夫『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財 第7集）太宰府市教育委員会 1983
- (5) 地藏山墓地跡（奈良県山辺郡山添村広瀬字地藏山）の現地説明会資料による。
- (6) 吉井敏幸ほか『^{近畿}中世葬送墓制の研究調査概報』（財元興寺文化財研究所 1984
- (7) 続群書類従刊行会『群書類従』第29輯
- (8) 未報告。1988年度刊行予定
- (9) 楠元哲夫ほか『能峠遺跡群Ⅰ（南山編）』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第48集）奈良県立橿原考古学研究所 1986
- (10) 木村泰彦ほか「長岡京跡右京第130次（7ANKNC 地区）調査概要－右京五条三坊十四町・西陣町遺跡－」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第2集』財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター 1985
- (11) 『善信上人絵・慕帰絵』（新修 日本絵巻物全集 20）角川書店 1978
- (12) 照願寺蔵。石井進「中世の都市と墓」『週刊朝日百科 日本の歴史43』朝日新聞社 1987
ただし、新鸞上人伝絵はいくつか現存しており、善信上人絵は其中でも最も原本（草案永仁3年・今亡）に近い作品と言われている。（京都国立博物館『西本願寺の秘宝目録』西本願寺 1980）
このため、同一原本からこの照願寺蔵本も模写されていることが考えられ、描写の近似は当然であるかも知れない。
- (13) 西岡実・安良岡康作校注『新訂 徒然草』（岩波文庫30-112-1）岩波書店 1985
- (14) 平田定幸・丸山康晴ほか『浦ノ原窯跡群』（春日市文化財調査報告書 第11集）春日市教育委員会 1981
- (15) 山本信夫ほか『宮ノ本遺跡』（太宰府町の文化財 第3集）太宰府町教育委員会 1980
- (16) 石松好雄ほか『大宰府史跡 昭和58年度発掘調査概要』九州歴史資料館 1983
- (17) 山本信夫『大宰府条坊跡』（太宰府町の文化財 第5集）太宰府町教育委員会 1982
- (18) 山本信夫『付篇Ⅰ』『大宰府条坊跡Ⅲ』（太宰府市の文化財 第8集）太宰府市教育委員会 1984

追記：本書で引用した大宰府関係の遺構番号は以下のように分類される。

条 19 S E 089
 条坊 調査次数 遺構種別 個別遺構番号

「条」の部分が「大」の場合、大宰府史跡の調査次数を示すこととなる。

土器の器種分類については『条坊Ⅰ』『条坊Ⅱ』（前項の註の4・17）に準ずる。

別表・土器の量表

A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底のナデの有無
D. 板状圧痕の有無 ㊦須恵器 ㊧土師器 単位cm

ST005

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	7	—	—	—		
	2	8	—	—	—		
㊦坏	3	9	—	—	—		

SX010

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊧大蓋 c	1	10	—	—	—		
㊦皿	2	12	18.8	2.4+	—		
㊦坏	3	11	13.0	3.5+	—		

SX004

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦小蓋 a	1	13	10.2	1.6+	—		
㊦坏 c	2	14	—	—	10.2		
㊦小坏 c	3	15	10.8	4.3	7.4		

SX001

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧小皿 a	1	1	7.4	1.5	5.1	○	○
	2	2	7.8	1.4	6.4	?	×
	3	3	8.3	1.1	6.8	○	○
㊧小皿 b	4	4	6.0	1.4	4.6	○	○
	5	7	12.6	2.8	8.6	○	○
㊧坏 a	6	5	13.4	3.5	9.5	○	○
	7	6	—	—	4.8	×	×
	8	8	10.7	3.2	4.9	×	×
㊧坏 b	9	9	10.8	2.7	4.8	×	×
	10	10	—	—	4.8	×	×
	11	11	—	—	4.8	×	×

ST023

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧小皿 a	1	1	8.8	1.3	7.0	×	×

ST013

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧杯 b	1	2	12.7	3.4	6.9	×	×
	2	3	14.0	3.6	7.4	×	×

ST030

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧杯 b	1	1	12.6	2.7	7.0	○	×

ST034

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧小皿 b	1	2	6.6	1.4	3.5	×	×

ST014

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	1	15.6	2.1	—		
	2	2	16.2	1.8	—		
㊦坏 c	3	3	13.2	4.4	9.6		
	4	4	13.4	4.7	9.0		

1号窯床面

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	4	13.8	1.3	—		
	2	1	14.0	1.6+	—		
	3	3	15.0	2.7	—		
	4	2	15.5	2.7	—		
㊦大蓋 c	5	5	19.2	2.4+	—		
㊦坏 a	6	6	13.2	3.6	9.6		
㊦坏 c	7	7	12.8	4.4	9.6		

1号窯埋土中

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	1	14.6	1.6	—		
	2	2	14.8	2.8	—		
	3	3	15.6	1.9+	—		
㊦坏 a	4	4	13.8	3.8	12.0		
㊦坏 c	5	5	13.8	4.1	9.8		

灰原

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	2	13.1	1.9	—		
	2	3	13.6	2.1	—		
	3	15	14.0	2.5	—		
	4	16	14.3	2.0	—		
	5	4	14.3	2.4	—		
	6	5	14.4	2.3	—		
	7	6	14.4	2.3	—		
	8	7	14.4	2.7	—		
	9	1	14.5	2.0	—		
	10	17	14.5	2.3	—		
	11	8	14.5	2.5	—		
	12	18	14.6	2.3	—		
	13	9	14.6	2.5	—		
	14	10	14.7	2.5	—		
	15	11	14.7	1.8+	—		
	16	12	14.8	2.5	—		
	17	13	14.9	2.1	—		
	18	14	15.0	2.8	—		
	19	19	15.5	2.5	—		
	20	20	15.8	2.6	—		
㊦大蓋 c	21	24	17.9	2.3	—		
	22	21	18.0	2.6	—		
	23	22	18.1	3.0	—		
	24	23	18.6	2.8	—		
	25	25	19.7	2.7	—		
	26	26	20.1	3.3	—		
㊦坏 a	27	27	13.2	4.5	10.7		
㊦坏 c	28	34	11.6	3.7	8.1		
	29	35	12.2	3.7	8.6		
	30	28	13.0	4.1	9.2		
	31	36	13.1	4.3	8.8		
	32	29	13.2	4.1	9.8		
	33	37	13.4	3.9	9.3		
	34	38	13.4	4.1	10.2		
	35	30	13.8	4.2	9.6		
	36	31	13.8	4.3	9.8		
	37	39	13.8	4.0	9.4		
	38	40	14.0	4.3	10.2		
	39	32	14.0	4.3	10.6		
	40	33	14.2	4.6	10.2		
	41	41	17.0	5.3	11.0		
	42	42	28.0	6.8	18.8		

SK015

器種	A	B	口径	器高	底径		
㊦坏蓋 c	1	1	15.5	1.7	—		

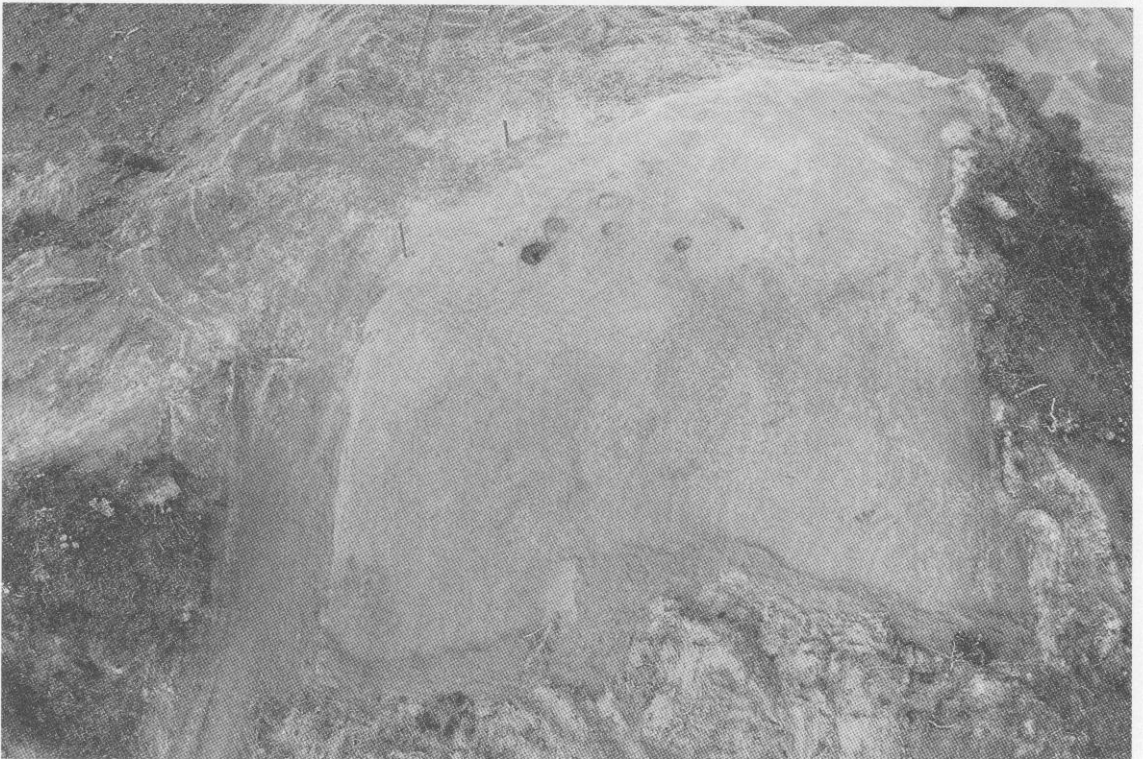
表土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
㊧坏 a	1	2	11.8	2.5	7.2	?	×
	2	3	12.4	2.5	7.4	×	×

図 版



篠振遺跡全景（空中写真・上方は水城跡）



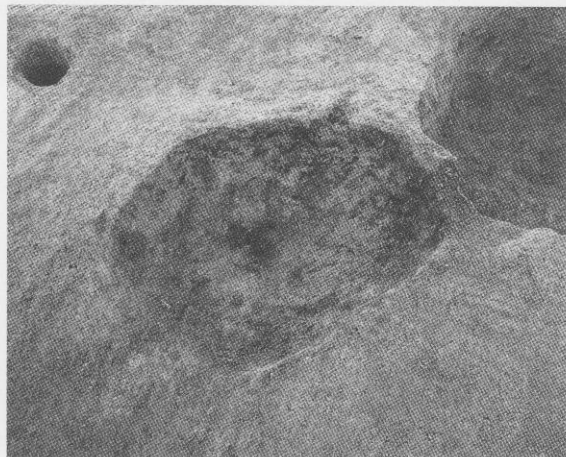
西調査区全景（空中写真・東から）



SX 010及び火葬墓群（東から）



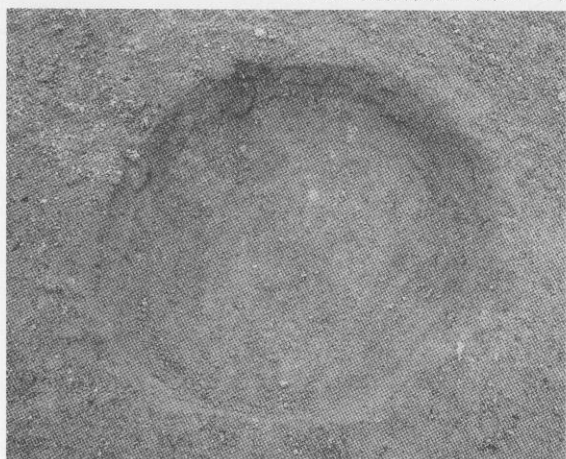
ST 005
遺物出土状況
（東から）



ST 005完掘状況（東から）



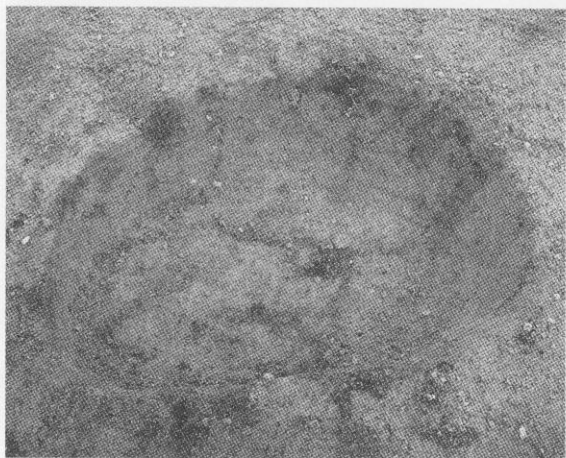
ST 005遺物出土状況（南から）



SX 006（東から）



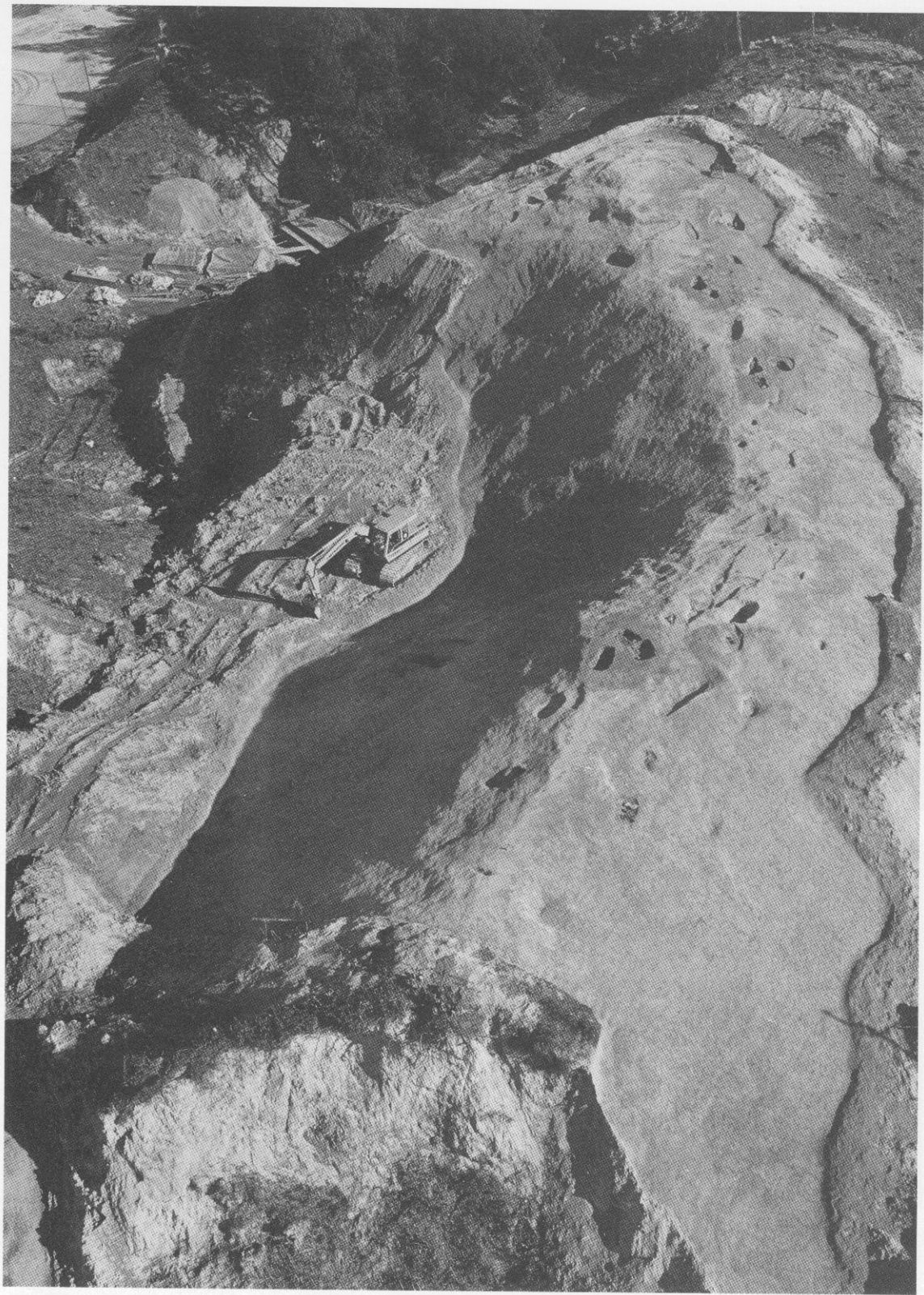
SX 007（東から）



SX 008（東から）



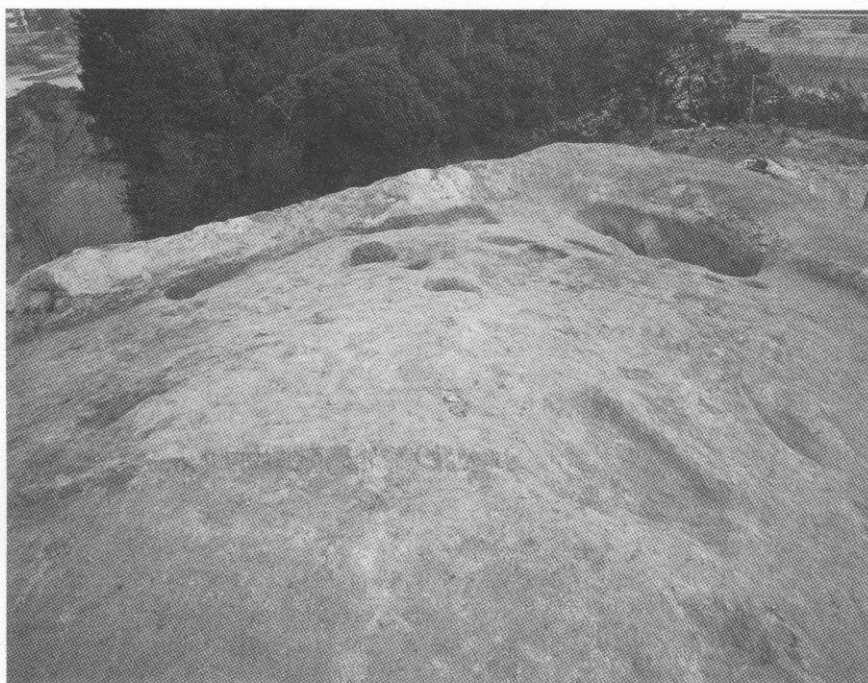
SX 009（南から）



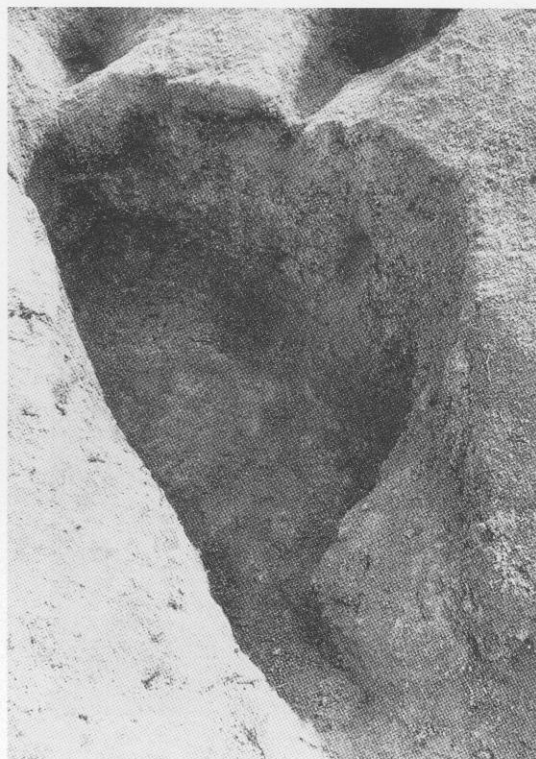
東調査区全景（南から）



SX 001調査前（北から）



SX 001調査後（南から）



ST 037 (西から)



ST 038・039 (北から)



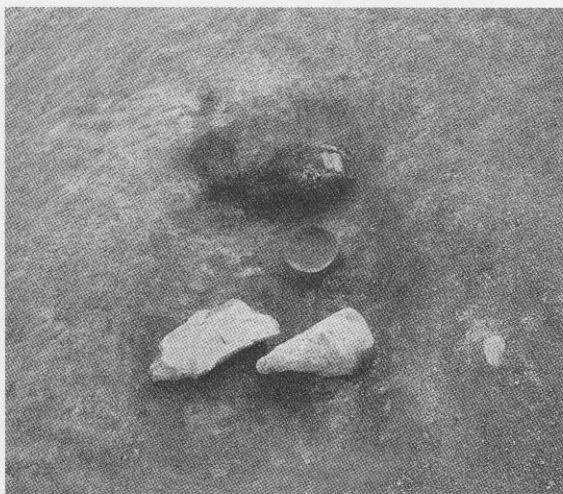
ST 042 (北から)



ST 043 (南から)



ST 023 (東から)



ST 030 (東から)



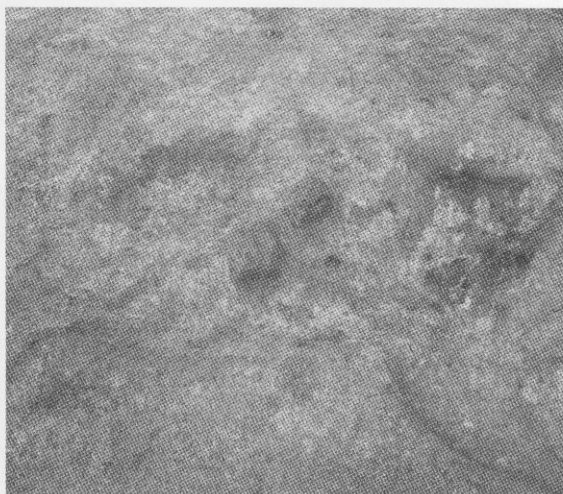
ST 026 (南から)



ST 031 (西から)



ST 029 (東から)



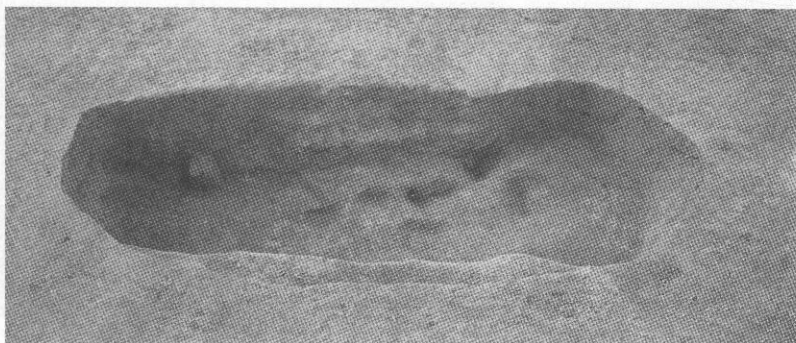
ST 036 (東から)



ST 033・034・035 (東から)



ST 014 (西から)



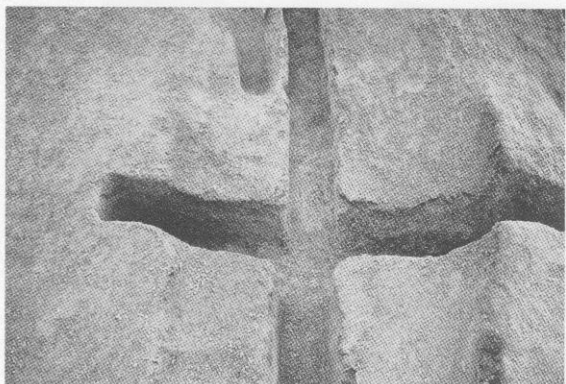
ST 017 (東から)



1号窯（北から）



2号窯（北から）



1号窯々体断割状況（北から）



2号窯々体断割状況（北から）



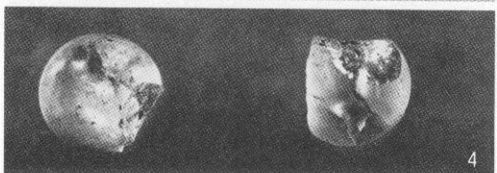
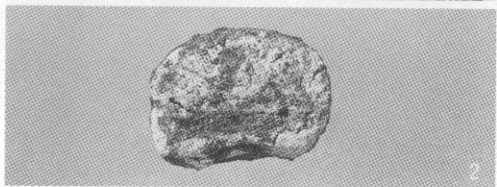
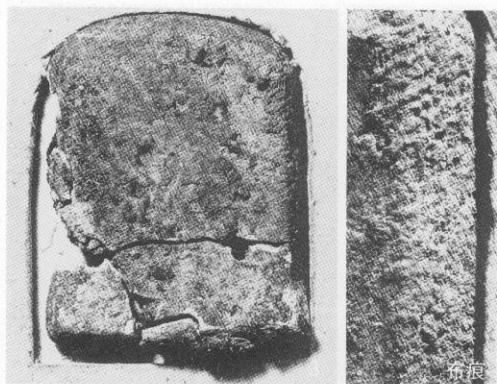
1号窯床面遺物出土状況（北から）



1・2号窯断割状況（東から）

Pla. 10

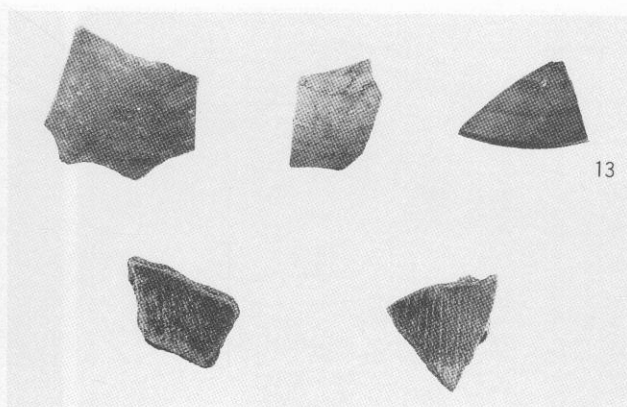
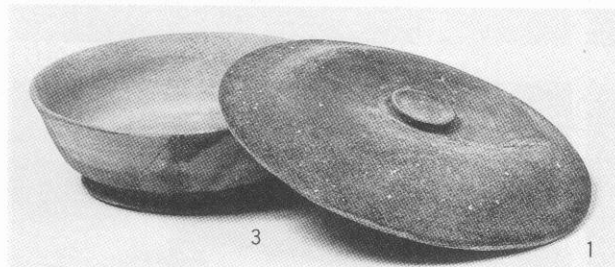
ST005



SX004

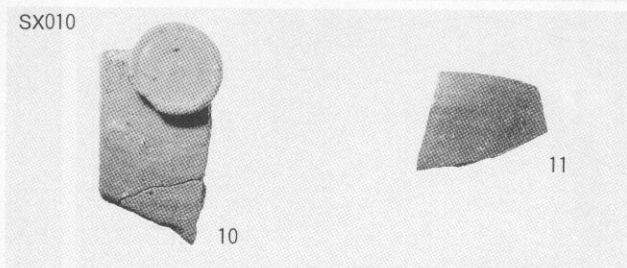


ST014



13

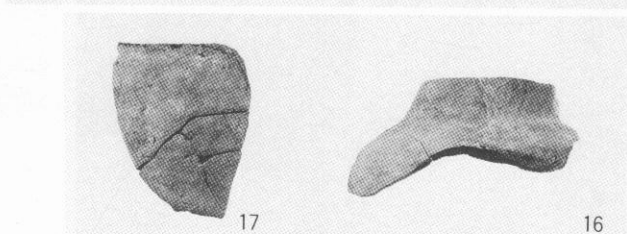
SX010



11



12



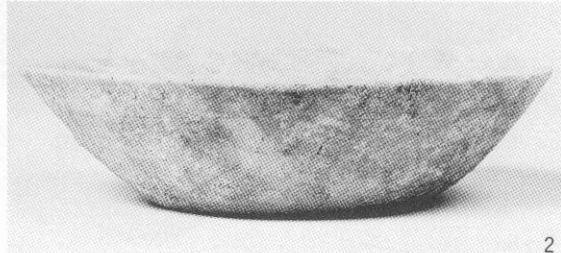
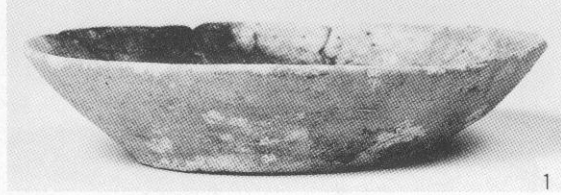
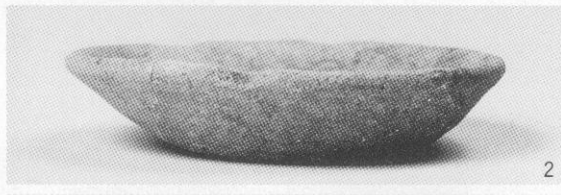
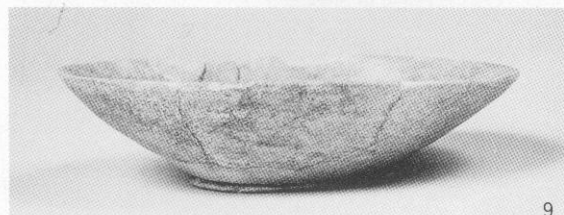
17

16

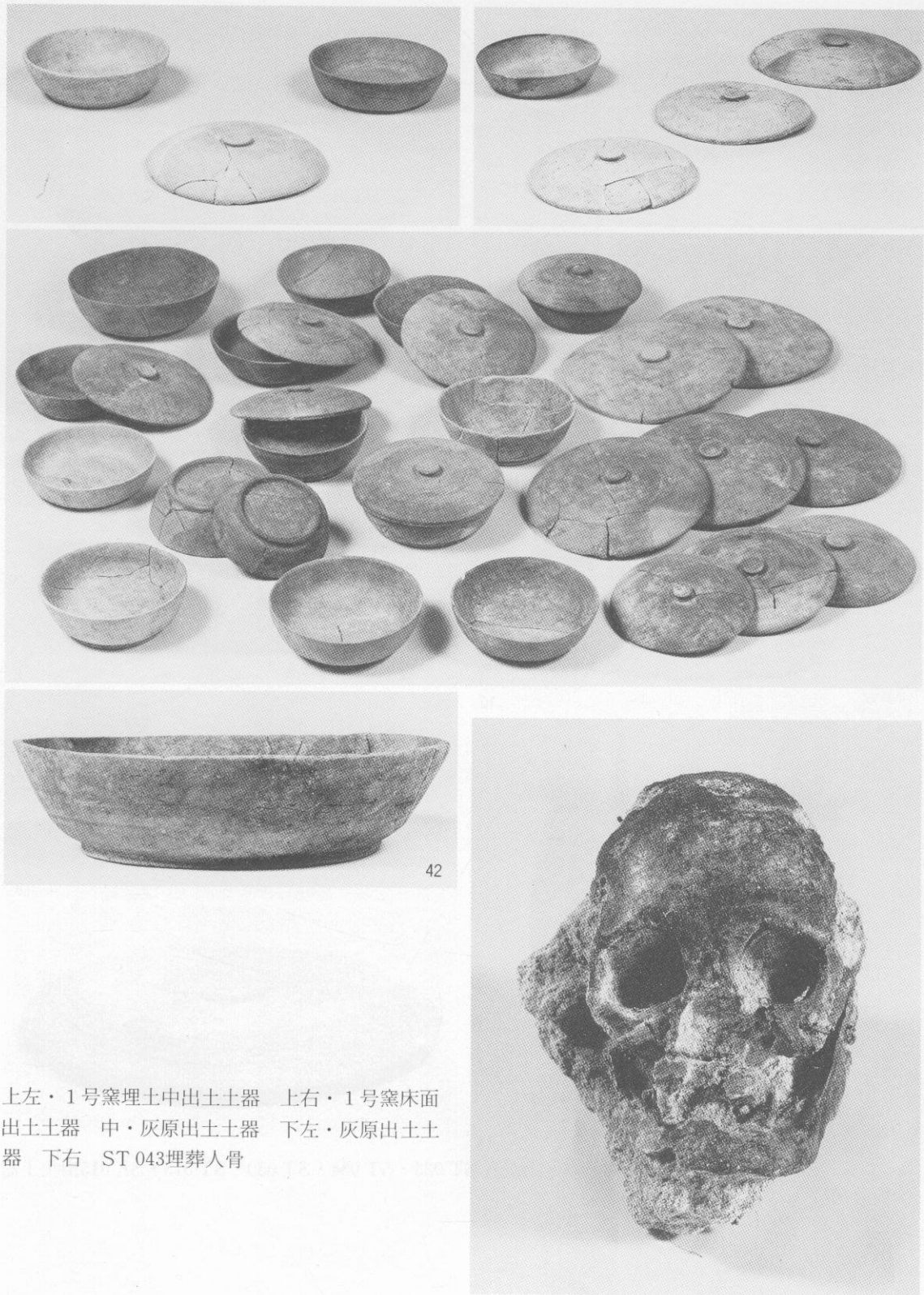


5

ST 005 • SX 010 • SX 004 • ST 014 出土遺物



左 SX 001出土土器、右・上から ST 023・ST 034・ST 030・ST 013・SK 015出土土器



上左・1号窯埋土中出土土器 上右・1号窯床面
出土土器 中・灰原出土土器 下左・灰原出土土
器 下右 ST 043埋葬人骨

篠振遺跡

—太宰府市の文化財 第11集—

1987, 3. 31

編集 財団法人 古都大宰府を守る会
発行 太宰府市大字観世音寺544-3
(大宰府展示館内)

印刷 瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神五丁目 4 番16号

太宰府市教育委員会の了解
を得て財団法人 古都大宰
府を守る会が増刷、頒布す
るものである。